

国立映画アーカイブ事業

「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」

報告書

国立映画アーカイブ事業

「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」報告書

目次

第1章 事業概要	02
第2章 事業報告	05
2-1 現地実態調査	
映画資料の所在に関する情報収集（概要）	06
映画資料の所在に関する情報収集（名古屋鉄道）	07
映画資料の所在に関する情報収集（名古屋市博物館）	08
映画資料の所在に関する情報収集（名古屋タイムズアーカイブス委員会）	10
映画資料の所在に関する情報収集（羽島市映画資料館）	12
映画資料の所在に関する情報収集（亀山市歴史博物館）	15
映画資料の所在に関する情報収集（小津安二郎松阪記念館）	18
映画資料の所在に関する情報収集（東映東京撮影所）	20
2-2 実証展示（調布地区における資料展示）	27
2-3 デジタルアーカイブ実証研究（映画資料のデジタルアーカイブ化）	32
2-4 映画資料所在地情報検索システム（JFROL）の一般公開と新規連携	38
2-5 全国映画資料アーカイブサミット 2024 報告	43
第3章 事業総括	48

第 1 章 事業概要

【実施概要】

第1部:事業の目的について

本事業は、歴史的・文化的価値のある我が国の貴重な文化関係資料が散逸・消失することのないよう、アーカイブの構築に向けた資料の保存及び活用を図るための望ましい仕組みの在り方について調査研究等を行い、映画関連の非フィルム資料のアーカイブに係る中核拠点の形成を図るため、当該分野のネットワーク化を推進することにより、分野全体のアーカイブの構築・運営や共同利用の促進等を行うことを目的としている。

第2部:事業内容について

(1) 調査研究の実施

令和5年度(2023年)の調査地区は、東海地区と関東(東京・練馬)地区を対象とし、非フィルム資料の所在情報及びデータベースの管理・運用・利活用等の調査研究を実施する。

① 非フィルム資料の所在に関する情報収集

I. 東海地区所在調査(現地実態調査)

地方の非フィルム資料所蔵館との連携を深めるべく調査地域を拡大し、東海地区における非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。同地区にて多数の映画資料をアーカイブしている岐阜県の羽島市映画資料館や著名監督の資料を所蔵している三重県の亀山市歴史博物館等を対象に、データベースの有無も含めて所在情報の収集・調査を行う。

II. 関東(東京・練馬)地区所在調査(現地実態調査)

関東地区における非フィルム資料の所在に関する情報について実地調査を行う。関東における映像撮影の一大拠点である東京都・練馬区の東映東京撮影所等を対象に、データベースの有無も含めて所在情報の収集・調査を行う。

② 非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討

I. 映画資料のデジタルアーカイブ化による保存と利活用の検討

映画資料の保存と利活用のために、映画資料のデジタルアーカイブ化を検討する。協力所蔵施設内の映画資料の中から貴重性や劣化の状態等によって選ばれた資料を対象に、画像データを保存し、所蔵施設内でのデジタル閲覧を可能にするデジタルアーカイブ化とその方法等を検討する。

II. 実証展示開催の検討(東京都内)

利活用実証実験として、調査で発掘された資料を通じ、日本映画文化の一面を紹介する実証展示を企画して開催する(プレスリリース等の広報を含む)。練馬地区の調査結果等を元にした資料展を通じて、資料の展示方法や資料所蔵施設同士のネットワークの推進等を検討する。

③ 非フィルム資料等の“所在地情報検索システム”の管理運用及び効果検証

「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」を一般公開し、新規にデータベースを連携する。令和2年度の京都府の東映太秦映画村・映画図書館と東京都の松竹大谷図書館、令和3年度の川喜多記念映画文化財団、令和4年度の松永文庫と早稲田大学演劇博物館に加えて、令和5年度は多数の映画資料を所蔵し積極的に活用している調布市立図書館等のデータベースを候補として連携を検討する。

(3) 成果報告

調査研究の成果をとりまとめ、国立映画アーカイブへ報告するとともに、その内容を公表する。また、非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員等による非フィルム資料のアーカイブ化に関するシンポジウム「全国映画資料アーカイブサミット2024」を開催し、成果を共有する。

① 全国映画資料アーカイブサミットの開催（オンライン）

令和4年度事業として実施された「全国映画資料アーカイブサミット2023」において構築された非フィルム資料に係る映画関係者、学識経験者、学芸員の昨年度からのネットワークの拡大・深化、及び提起された課題等の議論、本事業の成果の共有を目的として「全国映画資料アーカイブサミット2024」を開催し、セミナー・シンポジウム等を実施して相互理解を深める。

第3部：事業の実施体制について

本事業は、平成30年度～令和4年度文化庁事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）」として実施され、令和5年度から国立映画アーカイブに移管された。

平成30年度～令和4年度の5年間、委託業務として事業を実施した特定非営利活動法人映像産業振興機構（VIPO）が、令和5年度は国立映画アーカイブより委託を受けて事業を運営した。

【参考】 令和4年度「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」業務内容

- ① 非フィルム資料の所在に関する情報収集
 - ・北海道地区の所在調査（現地実態調査）
 - ・関東地区（世田谷、調布地区）所在調査（現地実態調査）
- ② 非フィルム資料の収集・保存・展示方法に関する検討
 - ・映画資料特別展開催（調布地区）
 - ・デジタルアーカイブ実証研究（映画脚本のデジタル化）
- ③ 非フィルム資料等の“所在地情報検索システム”の管理運用及び効果検証
 - ・JFROL の管理運用及び効果検証
 - ・JFROL を活用したデジタルアーカイブ実証研究
- ④ 成果報告
 - ・「全国映画資料アーカイブサミット2023」の開催

第 2 章 事業報告

映画資料の所在に関する情報収集

○平成 30 年度～令和 4 年度（文化庁委託事業として実施）

■概要

文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）では、京都の東映太秦映画村を起点に、徐々に対象地域を拡大して全国的な映画資料の所在地情報の調査を行ってきた。散逸、消失が進行する映画資料の所在地情報の調査は、喫緊の課題であり、保存と活用を推進するための望ましいアーカイブの構築の基礎となるものである。

関西地区から開始した調査は、次に関東の撮影所地区に展開し、更に撮影所地区以外の地方として、中国・九州地区、そして北海道地区まで範囲を広げてきた。対象施設についても、映画関連会社、撮影所、現像所、資料館、現地出身の俳優の顕彰館、現地ロケ作品等の映画資料のアーカイブ団体など様々である。以下が、その実績一覧である。

令和 4 年度までの調査地区・対象一覧

年度	地区	対象
平成 30	関西	①東映太秦映画村（京都）
令和元	関西	①東映太秦映画村、②神戸映画資料館（兵庫）
	関東（東京）	③松竹大谷図書館
令和 2	関東（東京・調布）	①角川大映スタジオ、②日活調布撮影所、③調布市立図書館、④調布市郷土博物館
令和 3	中国・九州	①田中絹代ぶんか館（山口）、②木暮実千代顕彰館（山口）、③北九州市立松永文庫（福岡）
	関東（東京・調布）	④東映ラボ・テック、⑤東京現像所、⑥高津装飾美術、⑦調布市立図書館
令和 4	北海道	①北の映像ミュージアム、②札幌映像機材博物館
	関東（東京・世田谷）	③TOHO スタジオ、④東宝映像美術、⑤世田谷文学館
	関東（東京・調布）	⑥東京現像所

○令和 5 年度の実績

過去事業から引き継いだ令和 5 年度事業の調査では、新たな地区として東海地区、関東（東京・練馬）地区を対象とした。対象施設一覧は下記の通りで、次ページより各対象別に報告をまとめている。

令和 5 年度調査地区・対象一覧

地区	対象	対象・所蔵資料
東海	①名古屋鉄道（愛知）	1957 年開催「日本映画博覧会」に関する資料
	②名古屋市博物館（愛知）	③からの預かり資料、エルモ社製の機材類
	③名古屋タイムズアーカイブス委員会（愛知）	名古屋タイムズ社から譲渡された写真ネガ
	④亀山市歴史博物館（三重）	衣笠貞之助監督の資料を所蔵
	⑤羽島市映画資料館（岐阜）	全国有数の所蔵資料数を誇る公立の映画資料所蔵施設
	⑥小津安二郎松阪記念館（三重）	小津安二郎が松阪市で過ごした時期に遺した資料
関東（東京・練馬）	⑦東映東京撮影所（東京）	映画制作資料等

名古屋鉄道株式会社 調査報告

■実施概要

対象施設：名古屋鉄道株式会社

日程：令和5年9月19日(火)

同席者：名古屋鉄道・野田あゆ子氏、山田育生氏、河村健二氏、石山薫氏
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ
事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■名古屋鉄道株式会社 基本情報

▶施設概要

所在地(資料庫)：非公開

設立年(本社)：明治27年6月25日

▶沿革・歴史

明治27年の愛知馬車鉄道設立免許以来、明治29年に名古屋電気鉄道と社名を改めて新発足し、大正10年に郊外線を引き継ぐ新会社の名古屋鉄道を設立(翌年に名古屋電気鉄道は解散)。以後愛知・岐阜における鉄道事業、開発事業を行い、名鉄グループでは、交通、運送、不動産、レジャー・サービス、流通などの各分野からなる企業集団を形成している。

■調査結果

1957年に名古屋鉄道株式会社(名鉄)と中部日本新聞社(現 中日新聞社)が主催した「犬山大自然公園 日本映画博覧会」に関する映画資料を調査した。本イベントは、1957年3月20日から6月2日まで(計75日間)開催され、松竹・東宝・大映・東映・新東宝・日活の映画6社からなる日本映画連合会(現 日本映画製作者連盟=映連)などが後援した。

名古屋市博物館 調査報告

■実施概要

対象施設：名古屋市博物館

日程：令和5年9月19日（火）

同席者：名古屋市博物館・藤原吉希氏

日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏

国立映画アーカイブ

事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■名古屋市博物館 基本情報

▶館概要

設置主体：名古屋市

所在地：〒467-0806 愛知県名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1

設立年：昭和52年（1977）10月1日

※リニューアル改修に伴い令和5年10月1日（日曜）から令和8年度（予定）まで長期休館中

▶映画資料公開・管理設備

企画展及び常設展の展示内容に映画資料が含まれることがある。

▶データベース

所蔵資料の一部は同館HP内のデータベースで検索できるようになっている。

■沿革・歴史

名古屋市の人口200万人突破記念事業の一環として開館。所蔵資料は考古、絵画、彫刻など様々で、数量は約2万4千件（27万点）である。常設展示室ではそれらの資料を用いて、旧石器時代から現代にいたるまでの「尾張の歴史」を紹介する展示を行っている。

■所蔵映画資料

- ・名古屋タイムズアーカイブス委員会所蔵の調査研究預り資料（写真ネガ）
- ・エルモ社の機材（映写機、カメラ等）

その他にフィルム、機材、チラシ、ポスター、パンフレット等を所蔵（映画資料の総数は不明）

■調査結果

名古屋タイムズアーカイブス委員会からの預かり資料については、年代別に大別された大量の未整理写真ネガ資料の中から、「日本映画博覧会」（今回同時に調査した名古屋鉄道所蔵資料に関連）が開催された1957年分の箱（事前に同イベントの掲載記事があることを確認した）、また長坂英生氏が個人的に確認するために出庫された別年代の箱を調査した。残念ながら整理途上の状態で当該資料の存在を確認することはできなかったが、名古屋タイムズの資料整理の一端を伺うことができた。

エルモ社（大正時代に名古屋で創業）の機材類については、かつて同社の社内展示室（「エルモ社

歴史館」。2019年閉館)にあった同社の映写機やカメラの一部(約90点)が寄贈されたものから一部を調査した。今回はその資料から国立映画アーカイブが未所蔵で、社史を参考に重要性が高いと思われるものを対象とした。一例としては、1925年にエルモ社の創業者・榊秀信氏が玩具映写機として初めて完成し発売した「35ミリ ヒコーキ印」や、1937年にサイレント映写機「雄飛号」の後に発売された<エルモサウンド>というトーキー装置が付けられた初の16mm「トーキー映写機 YUT」、1951年に製造された日本一小型軽量で海外にも優秀さが認められた16mmトーキー映写機「ホームトーキー-D-2」などである。また16mm映写機として登録されていた2台の映写機が実際には9.5mmフィルムの映写機であったことが現物確認で判明した。一方の映写機(同館リスト上の「D型」)に付属の9.5mmフィルムは、『照る日くもる日』(日活、1926-1927年、第一篇~第四篇公開、高橋寿康監督、大河内傳次郎出演)のものとして推定される(「加納八郎」という役名の字幕と大河内傳次郎が映っていることから推定)。もう一方の映写機(同館リスト上の「F-500」)に付属の9.5mmフィルムは外国映画のものであるが、詳細は確認できなかった。名古屋市博物館では映画が専門分野の学芸員は在籍しておらず、また受領時の当時の学芸員が既に退職済みであったり、膨大なコレクションを扱うなかで当該資料を確認する機会が少なかつたりするため、今回の調査によって、データと現物の不一致を是正できたことやデータ未登録の付属品に含まれていた貴重な資料を確認できたことは、望外の成果であった。全国の映画専門の学芸員が不在の資料館や博物館では、まだ十分に確認されていない映画資料が日の目を見ことを待っているかもしれない。さらに大量の各機材の取扱説明書等が、きれいな状態でケースにまとめて保管されていた。それらは古いものから新しいものまで幅広くあり、また日本語版だけでなく海外輸出用の英語版のものもあった。機材本体の貴重性もさることながら、脆弱で散逸しやすい付属の紙資料が残されていることは大変貴重である。



名古屋タイムズアーカイブ
ス委員会からの預かり資料



35ミリ ヒコーキ印



トーキー映写機 YUT



9.5ミリ映写機



9.5ミリ映写機付属の
フィルム



エルモ機材取扱説明書等

名古屋タイムズアーカイブス委員会 調査報告

■実施概要

対象施設：名古屋タイムズアーカイブス委員会

日程：令和5年9月19日（火）

同席者：名古屋タイムズアーカイブス委員会・長坂英生氏

日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏

国立映画アーカイブ

事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■名古屋タイムズアーカイブス委員会 基本情報

▶概要

所在地：個人宅のため非公表

設立年：2008年

▶映画資料公開・管理設備

大半の資料を名古屋市博物館に預けている。一部資料が整理や調査のために代表の長坂氏の個人宅に保管されている。

▶データベース

リスト管理なし

■沿革・歴史

1946年に東海地方初の日刊夕刊紙として創刊し2008年に休刊となった名古屋タイムズを発行していた社団法人名古屋タイムズ社の元社会部記者・長坂英生氏が、会社と交渉し同紙の写真ネガの所有権を譲り受けて設立。歴史の記録となる資料を散逸させないために4tトラック1杯分にもなる膨大な同資料の整理を進めている。

尚、社団法人名古屋タイムズ社は、当時の中日新聞社の相談役が設立した同社の関連法人である。名古屋タイムズは、東京系の夕刊紙や中日スポーツのような大衆紙がまだない頃に創刊された。中日新聞との住み分けがされており、社会事件や芸能、スポーツ等の記事が中心の名古屋タイムズは、地元の支持を集めていた。

■所蔵資料概要

ネガ…大量（整理中）

■調査結果

私たちが名古屋タイムズアーカイブス委員会の存在を知るきっかけとなったのは、同会代表の長坂氏が著した「なごや昭和写真帖 キネマと白球」（2022年、風媒社）であった。同氏は、名古屋タイムズ社から譲り受けた写真ネガを整理し、そのライブラリーを活用し、アーカイブ活動の成果として数

冊の書籍を上梓している。今回著書の執筆のためにご自宅で保管されている写真資料（前述の著書に未掲載のものも含む）を、適宜解説と共に調査させていただいた。今回の新聞社のアーカイブに関する調査は、これまで撮影所等の映画関連会社や資料館の所蔵資料を調査してきた本事業にとって、新たな類の調査であった。新聞社が持つ映画関連の写真資料は貴重なものが多く、例えば地元の映画館に関する写真はもちろん、各地方での映画のロケ写真や映画宣伝及び関連イベントの記録写真など映画会社が持っていないものも多い。

調査した資料は、写真、ネガ、新聞記事である。一例を記すと、写真は、地元の映画館の記録写真（当該記事と一緒にファイリングされたものもある）や、映画館の従業員や観客の様子を記録した写真など。ネガは、俳優関係のものでは、三船敏郎と司葉子が『日本誕生』（1959年、稲垣浩監督）の巡業で熱田神宮を参拝したときの写真や、大映の『都会という港』（1958年、島耕二監督）の市内ロケ時の主演の山本富士子を捉えた写真など。イベント関連の写真では、名古屋タイムズ主催で昭和31年に名古屋市の百貨店・丸栄で開催された「第二回映画百貨展」で俳優の木田勝二や朝丘雪路がサインをする様子（当時の新聞記事を参照すると、徹夜2日間で開幕を待つ観客がいたことや、開催2日目にして来場者数1万名を超えたこと、撮影所の縮小セットが多く展示されていたことが確認できる）や、第3回の同展では映画会社各社別に製作または配給作品のポスターが掲示されていた様子が伺えた。

またそれらの写真資料から、新聞社ならではの保管・整理方法が確認できた。例えば写真やネガを挿入する封筒には、分類、資料名、展示名、所有者、分野、フィルム種別（カラー／モノクロ、ネガ／ポジ、サイズ）、備考、撮影年月日、担当者の記入欄があり、空白箇所は自由記述欄としても利用されている。他には、ネガが挿入されたパラフィン紙のインナージャケットには、要項（ジャンル）、撮影日、場所、氏名（被写体）の記入欄があったり、写真の裏面に、その写真が使用された記事の切り抜きがセロハンテープで貼付されていたり、掲載記事面、日付などが記載されていたりしているものもあった。

写真資料類と併せて確認したマイクロフィルムやデータから起こした映画関連記事等からは、当時の名古屋の映画館を紹介する連載記事や映画館の番組表の紙面の大きさや掲載館数の多さから当時の映画の活況ぶりが伺えた。

以上のように、新聞社が遺した資料は、映画製作や興行、宣伝の資料として、あるいは映画に限らない地域の文化資料としても大変興味深いものであり、企業アーカイブの重要性を認識させるものであった。



山本富士子
（大映『都会という港』）



第三回映画百貨展より



写真裏面



映画館窓口の写真



写真封筒



連載記事と
映画館写真

羽島市映画資料館 調査報告

■実施概要

対象施設：羽島市映画資料館

日程：令和5年9月20日（水）

同席者：羽島市映画資料館・今井田康雄氏（館長）、近藤良一氏（相談役）、資料館職員
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■羽島市映画資料館 基本情報

▶施設概要

設置主体：岐阜県羽島市

所在地：〒501-6241 岐阜県羽島市竹鼻町 2624-1

TEL：058-391-2234

設立年：1996年2月

開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日：毎週月曜日祝日の翌日、年末年始（12月28日～1月4日）

入館料：大人（高校生以上）1人300円／団体（10人以上）1人250円／中学生以下無料
障がい者割引（付添人1人まで）1人150円

HP：<https://hashima-rekimin.jp/>

▶映画資料管理設備

- ・展示室（寄贈を受けた映画ポスター、スチール写真、小道具などの映画資料を展示。毎月第2土曜日には「映画のつどい」を開催し、映画上映を実施）
- ・収蔵庫（廃館になった映画館や個人のコレクターから寄贈された10万点以上の資料を管理）

▶データベース

- ・独自ソフトによる検索データベース（地元のソフトウェア開発会社によるクラッチ開発。データベースはOracle、オンプレミス環境）

▶沿革・歴史

東映建設の事務所として利用されていた竹鼻朝日館（1934～71年）の建物が1990年に取り壊されようとした際に、戦前から戦後の映画ポスター、スチール写真、照明器具など資料約3000点が発見され、建物保存の運動の動きが芽生えた。翌年から市民有志の「竹鼻朝日館を守る会」によって保存運動が推進されたが、老朽化により維持が困難と判明し、1993年に建物が取り壊された。1996年に跡地に羽島市映画資料館が建設され、本館は歴史民俗資料館と映画資料館が併設している。建物の南面は、竹鼻朝日館の正面がモチーフとなっている。

■所蔵資料概要 (令和5年9月現在)

資料種別	点数	資料種別	点数
映画ポスター	45,196	映画関連書籍	2,330
映画脚本	109	映画関連雑誌	1,733
映画プレス資料	8,160	映画スチル写真	39,040
映画パンフレット	9,574	映画関連機材	105
その他	朝日館(1934～71年)で使用されていた無声映画時代の太鼓、貸傘、貸火鉢、劇場用いす、広告宣伝用銅版、宣伝用旗等		

■調査結果

羽島市歴史民俗資料館と併設された羽島市映画資料館は、映画生誕百年の翌年にあたる1996年2月に開館した。<日本でもめずらしい公立映画資料館>と告知されているとおり、映画ポスターを中心に、パンフレット、チラシ、チケット、プレス、スチルなどの宣伝材料のほか、映写機などの映画機材類や映画雑誌など、映画資料を横断的に収集し、所蔵資料点数132,261点(令和5年9月現在)は、まさにその名に恥じない規模を誇っている。こうした資料の充実振りには、資料館の敷地が竹鼻朝日館という映画館であったことが深く関係している。1934年3月に開館した竹鼻朝日館は、当初は極東キネマや大都映画を上映していたが、戦後は東宝、松竹など大手の作品を興行し、1950年代末に東映系となり名称を「竹鼻朝日東映」と改め、1971年まで地元住民に親しまれた映画館として営業を続けた。資料館の常設展示では竹鼻朝日館の資料として、当時の映画館や経営者(活弁士でもあった)の写真、「活動館費用記入帳」、劇場の椅子、館名入りの番傘、呼び込みに使用した太鼓、貸火鉢、料金表、大入袋など、戦前から戦後黄金期にかけての映画館の具体的な様態を知る上で、他に類を見ない資料群が大切に保管されている。廃館後に散逸しても不思議ではないこうした資料が残っている背景には、木造近代建築である映画館の建物を保存しようとした市民運動の盛り上がりがあったことも見逃せない。結果的に老朽化を理由に建物保存はかなわなかったが、解体にあっては建築学の専門家が実測調査を行い、新築の資料館の正面と三角の屋根の形は、竹鼻朝日館の面影を再現したものとなった。さらに調査の過程で映画館から映画ポスターやスターのサイン入りブロマイドなど約3千点の資料が発見されたことも、映画館が上映施設であるとともに、映画資料の保管庫・宝庫であることを気づかせてくれる事例であるといえる。また、映画館保存運動が拡がりを見せていた時期に、竹鼻朝日館の近隣にあった竹鼻八千代劇場(1922年に芝居小屋として開館、のち映画館に転向、1964年の閉館後は地元スーパーや倉庫として使用)から見つかった「マキノ直営巡業部提供」と名称の入った『快人狼 中篇』(1926年)や『神州天馬俠 第一篇 第二篇』(1928年)などのポスターは、映画史的にみても極めて貴重なもので、当時のマキノ映画の宣伝で常態化していた挿絵をアレンジしたデザインといい、日付と館名を書き入れられるように空欄にした印刷形式といい、おそらく現存が確認される唯一無二の資料と思われる。

上記のような資料館の成り立ちもあり、常設の資料展示室には、竹鼻朝日館の資料に加え、廃館になった映画館より寄贈を受けた機材関係の展示が、わかりやすいキャプションとともに所狭しと陳列されている。主なものは、長野県根羽村の映画館「森盛(しんもり)会館」で使用されていたアーク式35mmローヤル映写機(1947年製造)、業務用のアーク式16mmエルモ映写機(型式LC-3)、岐阜土地興行より寄贈された移動用35mm新響製映写機(型式GX-1600)、愛知県弥富町の「弥富館」で使用されていた35mmスターレックス映写機(1953年製造)、形状から「タコ」と呼ばれた水銀整流

器など。珍しい機材では、映画館の休憩時間に広告宣伝用に使われていたスライド映写機があり、キャプションには「昭和30年代から使用されていたようである。1枚が30秒、全部で15枚可能である」と解説されている。

収蔵方針は主に寄贈を主体としている。設立の経緯から過去の映画資料の充実はみてきたとおりだが、最近作についても地元の映画館で上映された映画ポスターやバナーが定期的に寄贈されている。このことは、近年の映画ポスターの流通が限定的であることを考えると、将来に残すべき新作の映画資料が継続的に収集されている事実は示唆に富んでいる。また定期的に行われる映画上映に合わせて、来場者との交流も盛んで、そうした信頼関係の中から映画資料コレクターとのつながりがうまれ、寄贈にいたる事例もある。今回閲覧した中では、時代劇スター嵐寛寿郎ファンの旧蔵品である地方版や再映のポスターなどは正規品とは別の意味で映画需要の多様性を発見させてくれる品々である。

資料の整理方法は、ポスター、パンフレット、チラシ、プレスシートは1作品5枚までとルールを決め、データベースに登録し、敷地内の別棟の保存庫に保管されている。

このたびの調査には元館長の近藤良一氏が同席され、彼が手掛けた「昭和岐阜シネマ事情 わが町の映画館展」「大映の時代劇監督・田坂勝彦展」「権田コレクション 疾風！嵐寛寿郎展」などの展示記録と調査資料を拝見できたことも大きな収穫であった。

資料館の入口では、絵看板師・高木紀彦(としひこ)氏による東映時代劇スターを中心とした似顔絵の看板が出迎えてくれる。映画が大衆娯楽の花形だった時代にタイムスリップさせてくれる光景だが、このような資料規模と活動実績がありながら、予算や人員の制限から外部への資料提供などが困難な状態にあることは惜しむべき事柄だともいえる。



竹鼻朝日館・館名入りの番傘



『快人狼 中篇』（1926年）、
『神州天馬俠 第一篇 第二篇』
（1928年）ポスター



アーク式 35mm ローヤル映写機
（1947年製造）
※長野県根羽村の映画館「森盛会館」
で使用された



移動用 35mm 新響製映写機
（型式 GX-1600）
※岐阜土地興行より寄贈



スライド映写機



東映時代劇スター中心の絵看板
（絵看板師・高木紀彦氏による）

亀山市歴史博物館 調査報告

■実施概要

対象施設：亀山市歴史博物館

日程：令和5年10月12日(木)

同席者：亀山市歴史博物館・小林秀樹氏(館長)、中川由莉氏(学芸員)

日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏

国立映画アーカイブ

事務局(特定非営利活動法人映像産業振興機構)

■亀山市歴史博物館 基本情報

▶施設概要

設置主体：三重県亀山市

所在地：〒519-0151 三重県亀山市若山町7-30

TEL：0595-83-3000

設立年：1994年

開館時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日：火曜日(祝日の場合、翌日が休館)、年末年始(12月29日～1月3日) ※臨時休館あり

入場料：一般＝個人200円(団体160円)／児童・生徒・学生＝個人100円(団体80円)

／乳幼児・70歳以上＝無料／※企画展は無料

HP：<http://kameyamarekihaku.jp/>

▶データベース

- ・HPのトップページ内「館蔵資料データベース」(画像掲載あり)

▶沿革・歴史

亀山市民の教育、学術及び文化の発展に寄与し、新たな地域文化を創造するため、平成6年10月1日に旧亀山市において開館した。これにより、市域の原始から現代までの内、特に民家や寺社等に残る近世の古文書等の歴史資料、典籍、民俗資料、刀剣や書画等の美術工芸品等を収集、保管、展示しこれらを広く伝える博物館活動を通じて、旧亀山市の履歴を資料によって説明して来た。平成17年1月11日に旧亀山市と旧関町が合併し、新しく亀山市となってからも、市唯一の博物館として位置づけられたことにより、対象とする市域が拡大し、国史跡となった古代の鈴鹿関や東海道、大和街道の宿場など、歴史的事柄の繋がりも広がり、博物館資料による市域の歴史も多様に説明することになった。また、亀山市で2003～2011年にかけて全国初の試みとして「IT市史」編纂事業が行われ、その流れで同館所蔵資料の多くが同館HP内「館蔵資料データベース」で検索・閲覧できるようになっている。

■所蔵資料概要（衣笠貞之助関連資料）

今回調査対象とした資料（小亀家旧蔵資料から一部のみ）

資料種別	点数	資料種別	点数
アルバム	4	契約書等	11
台本	14	写真	12
香盤・企画書等	3	メモ	4
スケッチブック	1	その他	複数
場面割表	1		

※その他に衣笠映画塾が収集した資料を所蔵している。

■調査結果

衣笠貞之助監督の故郷・亀山市にある亀山市歴史博物館に監督と衣笠家ゆかりの資料が多数保存されていることは、インターネット上に存在する同館の館蔵資料データベースを検索すると誰でも確認できる。たとえば、資料名「受賞盾「狂った一頁」」に関しては、資料番号「3-3-00-kk002-003」（この<kk>は小亀家の京都からの資料群搬入を表している。<tk>であれば、小亀家の東京からの資料群搬入の意となる。）、資料群名「衣笠貞之助資料」、保管場所「一般収蔵庫」、備考「紙箱入り。楯の表に「大正拾三年度／日本優秀映画賞／贈／衣笠映画連盟製作／狂った一頁／全関西映画協会」の金字。中央にレリーフが埋め込まれている〔など〕」というように基本的な所蔵品情報が表示され、場合によっては写真が複数掲載され、拡大することができるため細部まで見ることができる。このように画像を含めたデータベースが充実しているため、今回の調査では、京都と東京で保管されていた840点ほどの小亀家寄贈衣笠貞之助資料の中から、現物確認を要する60点あまりを閲覧した。抽出の基準は、画像のない写真類、台本への書き込みの有無、契約書など会社資料の詳細である。

主なものを列挙すると以下のとおり。「衣笠監督アルバム」と題された4冊の写真アルバムは、関東大震災以前に日活向島撮影所で製作された新派映画（現代劇映画）で、衣笠が監督になる以前の俳優時代（花形の女形）の作品スチルである。作品名を挙げると1918年のデビュー作『七色指輪』（役名「早苗」と記載あり）から『犠牲』『女気質』『雪枝夫人』『毒煙』『二人娘』『暁』『捨てられた母』『生ける屍』（役名「サーシャ）』『金色夜叉』『桜の家』『乳姉妹』『黒水晶』『兄と弟』『続金色夜叉』で、各作品5枚から10枚程度の場面スチルが貼られている。いうまでもなくこの時代の映画フィルムは現存しておらず、写真なども雑誌掲載に限られるため、オリジナルの紙焼きは稀有である。さらにこのアルバムの存在は当時の衣笠のスター性の証左であり、そのアルバムを大切に保管していた衣笠の本人の自己の来歴への誇りさえも感じさせてくれる。ポートレートに関しては、衣笠が1928年から29年にかけてソ連経由で渡欧した際の、監督のプドフキンやエイゼンシュテインに面会した折、本人から貰ったと思われるもので、サイン入りのものであった。

次に台本であるが、監督の時代の松竹下加茂作品『雪之丞変化』三部作（1937年）、東宝移籍後の『川中島合戦』（1941年）、『女優』（1947年）、大映時代の代表作『地獄門』（1953年）を調査したが、どれも書き込みなどはなく、そのほかの台本類も監督使用台本ではないと思われる。製作資料としては『川中島合戦』ロケの際に描いたと推定されるエキストラの動きを書き込んだスケッチブックを確認し、「場面割表」とだけ登録されている資料に関しては実見の上『かげろう絵図』（1959年）のものと特定した。「箱根用水」の台本と企画書からは、山本薩夫監督の完成作『箱根風雲録』（1956年）以前に映画化の打診が衣笠監督にあったことが裏付けられた。

契約書は、1934年に松竹と取り交わされたものと、戦後1951年、53年、56年に大映と交わされた

書類を調査した。公表されることのない契約条件や契約金などの実際が記載されており、繊細な事柄だけに慎重な調査を要するが、自伝でも言及されている衣笠と松竹の貸借関係などを考証する上で重要な資料であり、歴史的な事象としてこうした分野の研究が進むことも期待したい。

また「モスクワメモ」、「モスクワ古い原稿」と書かれた原稿類は、遺作となったソ連と大映の合作『小さい逃亡者』（1966年）にロケした際、衣笠が見聞したソ連映画界に関するものであることが検証できた。

博物館の前庭には衣笠による「故山遠慕」の一文が原稿の筆致のまま石碑に刻まれている（衣笠映画塾による建立、後に市へ寄贈、博物館資料として建立場所のまま展示）。旧亀山市名誉市民でもあった衣笠監督の歿後、その業績の継承を目的に市民団体「衣笠映画塾」が1997年に発足し、上映会に加え、遺族や関係者との交流を続け、晩年に監督が残した原稿類を管理していた。石碑の一文もそうした原稿の一部であり、館蔵資料データベースからは大きな文字で書かれた衣笠の原稿を見ることができ（石碑は衣笠映画塾により建立され、後に市へ寄贈、博物館資料として建立場所のまま展示されている。また衣笠映画塾収集資料も後に博物館に寄贈された）。故郷に愛された偉大な映画人の資料が、遺族や関係者の手によって大切に保管され、公共機関に寄贈・公開されていることは映画史を研究する人々にとっては心強い限りである。

今回は時間の関係で現物の閲覧はかなわなかったが、博物館には衣笠の兄・小亀衝一が経営していた新町座（演芸場として1931年に開館、のち映画館に転じ1964年に閉館）の資料もあり、館ホームページ上の「企画展 web 図録／第22回テーマ展示 劇場 新町座」（2012年）でみることができる。これらの資料は地方のユニークな娯楽施設のありようが豊富な資料と共に解説されており、衣笠監督の作品『情炎』（1959年）の宣伝用暖簾も目にすることができる（なお当該資料は収蔵のための整理作業が続けられている）。



衣笠監督アルバム

1918年のデビュー作『七色指輪』
(役名「早苗」と記載あり)



『川中島合戦』スケッチブック
(ロケ時[推定]のエキストラの動き
を書き込んだもの)



『かげろう絵図』（1959年）
「場面割表」



『箱根用水』脚本



衣笠貞之助と松竹との契約書
(昭和9年8月7日)



メモ「モスクワ (一)」

小津安二郎松阪記念館 調査報告

■実施概要

対象施設：小津安二郎松阪記念館

日程：令和5年10月13日（金）

同席者：小津安二郎松阪記念館・岩岡太郎氏

日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏

国立映画アーカイブ

事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■小津安二郎松阪記念館 基本情報

▶施設概要

設置主体：三重県松阪市

所在地：〒515-0073 三重県松阪市殿町1539番地

TEL：0598-23-2381（松阪市立歴史民俗資料館）

設立年：2021年

開館時間：4月～9月 9:00～16:30、10月～3月 9:00～16:00

休館日：月曜（祝日の場合は翌日）、祝日の翌日、年末年始 ※展示替えによる臨時休館あり

入場料：一般：個人150円（団体120円）

6歳～18歳以下：個人70円（団体50円）

HP：<https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/rekisiminzoku/rekimin-riyou.html>

▶映画資料管理設備

- ・展示室（松阪市立歴史民俗資料館2階）
- ・収蔵庫

▶データベース

- ・Excelによるリスト管理 ※各コレクション別に整理されてリスト化。資料IDは未登録。

■沿革・歴史

小津安二郎生誕100年（2003）の前年である2002年12月に小津家が暮らした現・松阪市愛宕町に開館し、2020年に閉館した「小津安二郎青春館」の資料を引き継ぐ形で、2021年4月松阪市立歴史民俗資料館の2階に常設展示スペースとして「小津安二郎松阪記念館」がオープンした。

■所蔵資料概要

小津安二郎が松阪市で過ごしたときに遺した資料等

資料種別	点数	資料種別	点数	資料種別	点数	資料種別	点数
デッサン	48	手紙、葉書類	31点程度	映画雑誌	12	ポスター	3
習字	22	写真	127点（重複有）	新聞スクラップ	1点	パンフレット	4
宿題、教科書、ノート類	39	シナリオ台本	1	色紙	1		

■調査結果

小津安二郎は、松阪市で9歳から19歳までの青年期の一時期を過ごした。家のすぐ近所にあった映画館・神楽座に小津が足しげく通ったなど、小津の松阪時代は自身のアイデンティティを形成する重要な時期であった。小津安二郎松阪記念館は、松坂城跡敷地内の1912年に建てられた図書館を改装した松阪市立歴史民俗資料館の2階にあり、小津が松阪時代に遺した資料を収蔵し展示している。

展示室には、小津が書いた日記や手紙、絵、写真等があり、当時の小津の行動や考え、絵の才能、東京に戻る直前に勤めた飯高町での代用教員時代の様子の一端などを伺える。小津自身の資料以外にも、松阪商人の家系の父・寅之助が当主であった「小津新七家」の文書や祖父・新七が遺した歌舞伎絵や錦絵なども展示されており、さらなる小津のルーツや芸能面への影響なども知ることができる。また松阪市のみならず三重県志摩市で撮影された小津監督作品『浮草』（1959年）についても紹介されている。来場者が自由に閲覧できる形で、小津の義理の妹・小津ハマ氏が遺した同作の新聞スクラップブック（複製）が設置され、複数の同作ロケ地写真が展示されている。他にも小津監督の足跡をたどる映像が流れるモニター、タッチパネルのデジタル展示（「小津安二郎の言葉」、「ゆかりの地紹介」が表示される）もあり、小津と松阪の街と歴史を楽しみながら深く学べる展示となっていた。

今回展示資料以外の資料として、小津安二郎生誕120年を記念した企画展の準備のため収蔵庫から多くの展示候補資料が集められたタイミングで、作文、絵、習字、葉書、封書を確認した。詳述は避けるが一例を示すと、小津の級友である奥山正次郎氏に宛てた封書については、「小津安二郎君の手紙」（1965年、私家版）に未収録のもの、また同書掲載にあたり省略した文章を含むものも確認した。大正14年（1925年）5月28日の封書には、小津が徴兵されて1年以上経過した頃の心境や、小津が演習の暑さに耐えかねて仮病で入院したことなどが綴られていたりする。2004年に奥山正次郎氏のご子息・奥山純氏から提供された際のリストには、各手紙類の年月日、形態、宛先、送り人（住所）が記録されリスト化されている。

本施設関連で付け加えて紹介すると、松阪市内には、1993年に代用教員時代の小津の教え子たちによって結成された「飯高オーズ会」による顕彰施設「小津安二郎資料室」がある。小津と交流のあった人たちが飯高ならではの思い出や資料を遺し、映画界入り前の小津安二郎の様子を伝えている。

映画人の遺した、あるいはその人にまつわる資料は、その人の映画や人物像を語るばかりか、その人の過ごした場所と時間を語る記録、すなわち地理と歴史の資料でもある。松阪市では、「映画監督小津安二郎 青春のまち 松阪」として市内の小津ゆかりの場所が21ヶ所紹介されている。それにより小津から松阪市へ、あるいは松阪市から小津へと双方向的な回路が生まれる。物だけでなく場所の記録（記憶）もまた映画資料といえるかもしれない。人とモノと街は、相互浸透し合いながら互いを映し合う。担当学芸員によって、地元の資料提供者との緊密なネットワークが築かれていることは見事というほかになく、小津の過ごした小学・中学時代と重なり合うかたちで、現在の子どものための教育の場にもなっていることは、地域に根付いた映画資料アーカイブの新たな可能性に気づかせてくれる。



奥山正次郎氏宛の手紙
[大正14年(1925年)5月28日]



小津が描いた絵
(小学5年生時)



デジタル展示

東映東京撮影所 調査報告

■実施概要

対象施設：東映東京撮影所

日程：令和5年6月16日(金)、8月10日(木)、10月16日(月)、12月11日(月)

同席者：東映東京撮影所・渡辺直樹氏、石井辰也氏、
東映株式会社本社・小林俊正氏、梨田日色氏
日本映画史研究者／国立映画アーカイブ客員研究員・佐崎順昭氏
国立映画アーカイブ
事務局（特定非営利活動法人映像産業振興機構）

■東映東京撮影所 基本情報

▶施設概要

所在地：〒178-8666 東京都練馬区東大泉 2-34-5

TEL：03-3867-2701(管理部)

設立年：1951年

▶沿革・歴史

戦前の1934～42年に新興キネマ東京撮影所が、戦後の1947年に貸しスタジオとして「株式会社太泉スタジオ」となり、1951年に太泉映画、東横映画、東京映画配給の合併により東映株式会社が設立したことで、太泉映画スタジオが「東映東京撮影所」になった。設立から現在にいたるまで、映画やテレビドラマ、特撮などの多くの作品の撮影に使用されている。2010年に東映ラボ・テックと共同で東映デジタルセンターを設立したり、2023年に国内の映画会社として初のバーチャルプロダクション対応のLEDスタジオを保有し運用したりするなど、デジタル化時代への対応も積極的に行っている。

■所蔵資料概要

- ・映画脚本：東映作品＝約800冊
- ・ロケハン写真：映画＝約200冊以上、Vシネマ＝約100冊
- ・スチル写真アルバム
- ・美術資料
- ・トロフィー・賞状
- ・その他（社旗等）

■調査結果

今回の東映東京撮影所への映画資料調査は、これまでの撮影所調査にも増して、映画撮影所が日々新たな作品を生み出す製作・創造の現場であるとともに、映画史の掛け替えのない資料が蓄積し、われわれの問いかけに対して即座に答えてくれる、生きた映画史を学べる場所でもあるということを再認識させてくれた。まず応接室では、『トラック野郎 望郷一番星』（1976年、シリーズ第3作）の箱絵・原画「三代目一番星号」と『トラック野郎 天下御免』（1976年、シリーズ第4作）の箱絵・原画「四代目やもめのジョナサン号」が出迎えてくれる。「トラック野郎」シリーズは松竹の「男はつら

いよ」シリーズと張り合ったことでも知られる東映東京撮影所の大ヒット・シリーズである。ポスターやスチル写真ではなく、美術資料が飾ってあるところが製作現場ならではの光景である。所内には1945年頃と1957年、1965年、1983年、2010年の撮影所の航空写真が展示されており、規模の変遷がわかるだけでなく、終戦直後の写真には米軍が投下した爆弾の跡が「爆弾池」といわれていたとの説明をうけた。以下、主な調査場所である美術棟と、脚本等が保管されている倉庫の2箇所で行った調査結果を示しておく。

美術棟には、東映創業当初の1950年代から現在にいたる主な作品のロケハン写真スクラップブックが年代順に整理され保管されていた。これらは歴史的な写真資料として新作映画の参考資料に供されている。東映刑事ドラマの起点ともいえる「警視庁物語」シリーズ(1956～64年、全24作)の第19作『第19号埋立地』(1962年)のロケハン写真には、東京近郊の埋立地に隣接する貧困地区や、現在とは異なる渋谷駅周辺などが事細かに記録されており、ドキュメンタリー・タッチといわれる東映東京撮影所の伝統が垣間見える。内田吐夢監督の代表作『飢餓海峡』(1965年)の美術資料(美術監督・森幹男)からは、北海道や青森、東京の風俗街を丹念にロケハンした上で、所内にリアルなオープンセットを組んだことがセット図面やスナップ写真からわかる。『新幹線大爆破』(1975年)はその過激な題名により国鉄の協力が得られず、公式には新幹線運転指令室などのロケハンが許されなかったが、外国人による記録映画だと偽って指令室を見学、参考写真を撮影したことが佐藤純彌監督のインタビュー本にも記されているが、そのことが実証されるスクラップブックが美術部には残されている。まさにドラマよりもユニークな製作過程の逸話といえよう。また、撮影所の歴史遺産ともいえる二つの新聞紙がラミネート加工して保存されている。それは2008年11月、第6ステージが取り壊された際、ホリゾントの裏紙に貼られていた新聞紙で、日付が1934年、36年であることから新興キネマ東京撮影所時代のものであることを証拠立ててくれる。

1950年代から2000年代にかけての撮影台本が保管されている倉庫からは、『新幹線大爆破』で「大捜査網」という別題名の表紙を付した台本ほか、2人のスクリーンライター台本(佐伯節子の『昭和残侠伝 一匹狼』1966年、佐々木禮子の『網走番外地 悪への挑戦』1967年など)が確認できた。準備段階の台本からは「米 又は 青い湖」と表紙に書かれた『米』(1957年、今井正監督)の台本も見つかったが、今回の調査での大きな成果は、未映画化台本を閲覧できたことである。内田吐夢監督の「霧の中」(1956年、八木保太郎脚本)、マキノ雅弘監督の「草原の王者 大ジンギスカン」(1957年、依田義賢脚本)、深作欣二監督の「おっぺけ野郎 ダイナマイト騒動記」(1963年、福田善之・神波史男・小野竜之助共作)、田坂具隆監督の「石狩平野」(1968年、鈴木尚之脚本)、鈴木清順監督の「海援隊 母に捧げるバラード」(1974年、佐々木守・内藤誠脚本)、監督未定の「昭和の天皇」(1984年、笠原和夫脚本)などである(ほか詳しくは別表を参照)。企画が実現を見ずに頓挫する原因はさまざまに考えられるが、幻の映画台本を読むことによって「可能性の映画史」が拓けてゆく思いがする。

東映東京撮影所所蔵・未製作映画脚本リスト（一部）

	タイトル	作成年	監督	脚本	備考
1	翼の男[準備台本]	1954	内田吐夢	片岡薫、直居欽也[直居欣哉]	原作：八木保太郎。企画：斉藤安代。パイロットの話。1954年の企画だとすると内田吐夢が中共から帰国直後のものか。
2	霧の中	1956	内田吐夢	八木保太郎	原作：田宮虎彦。企画：マキノ光雄、堀保治、堀勇雄、植木照男。製作意図に「会津降伏人・戦災孤児としての宿命を担いつつ太平洋戦争の終結まで八十余年の波乱に富む生涯を叛骨の精神を以て貫いた中山荘十郎を通じて人生のあわれを謳いたい」とある。主人公の中山宗十郎には南原伸二を配役。シナリオは『キネマ旬報』1956年11月下旬号に掲載。
3	息子の願いは唯一つ[仮題][準備用]	1956	斉藤寅次郎	海野太郎	企画：福島通人。原案：旗一兵。登場人物は製薬会社守衛の寺川金吾、社長・大島万平とその息子・宏。『スイングジャーナル』1956年5月号に「フォア・ブラザーズを解散した小野満は東映で『息子の願いは唯一つ』に主演することが内定」（19頁）とある。
4	待てば来るか[準備台本]	1957	[未記載]	植草圭之助	原作：吉屋信子。企画：根津昇。シナリオは『映画評論』1957年3月号に掲載。植草は原作のことを「現代に生き抜いていく三十女の強靱な意欲が魅力的に浮き彫りにされた」と評価。
5	草原の王者成吉思汗(じんぎすかん)[仮題]	1957	マキノ雅弘	依田義賢	東映スコープ総天然色。企画：マキノ光雄。撮影：三村明。テムジン役は中村錦之助。京都作品ではなく東京作品であることは、『キネマ旬報』10月下旬号～11月上旬号の「撮影進捗状況」で確認できる。シナリオ「草原の王者 大成吉思汗」は『キネマ旬報 臨時増刊 名作シナリオ集』（第189号、1957年10月）に掲載。『笠原和夫傑作選 第3巻』の「笠原和夫作品リスト」の未映画化作品にこの作品があり、昭和33年4月執筆とある。笠原は企画流れの理由を「コスト面で成算とれず」としている。依田義賢は「シナリオと私の周囲」（『年鑑代表シナリオ集 1957年版』所収）で、「監督のマキノ正博さんの意見でシナリオライターのK君が、私の本を土台に、改訂した。私の王生[依田の作り出した架空の人物]はいなくなった。光雄氏が逝去した。前に、一部分を撮影されたのだが、再び、製作を再開するについて、正博さんがもういっぺん、私に本を直してほしいとのことで、来たのである」とあり、K君とは笠原和夫のことと思われる。
6	草原の王者大ジンギスカン[準備用]	1957	マキノ雅弘	依田義賢	東映スコープ・総天然色。企画：マキノ光雄、光川仁朗、小川貴也。撮影：三村明。『映画情報』1958年新年号には「錦ちゃんの『大成吉思汗』クラック・イン」のグラビア記事あり。それによれば1958年4月公開を目指してクラック・イン、晩秋の浅間高原から軽井沢方面にかけてロケを開始、スナップ写真も載っている。共演は中村賀津雄、故里やよいら。
7	女の声[準備台本]	1958年以前	新藤兼人	新藤兼人	企画：絲屋壽雄、山田典吾、能登節雄。新藤兼人が民藝の舞台のために書いた戯曲「女の声」を自身に手で映画脚本にした。のちに大映で自身の監督で『悲しみは女だけに』（1958年）として映画化。
8	詐欺師(べてんし)[仮題][準備台本]	1958	今井正	八木保太郎	原作：井上靖「黒い蝶」。企画：本田延三郎。シナリオは『シナリオ』1958年4月号に掲載。

9	俺たちのバラード 手錠のままの脱走[仮題][準備用]	1959			スタッフ欄なし。
10	東京鉄火娘[準備台本]	1960 ?		笠原良三、笠原和男[笠原和夫]	企画：原伸光。原伸光と笠原良三・笠原和夫は美空ひばりの「べらんめえ芸者」シリーズのコンビなので、その時期の作品か(『東京べらんめえ娘』1959年)。あるいは『笠原和夫傑作選 第3巻』の「笠原和夫作品リスト」の未映画化作品「続々べらんめえ芸者」(昭和35年6月執筆、同年の小石栄一監督作とは別作品)のことか。
11	恋の夕映え[準備台本]	1961	[未記載]	笠原和夫	原作：大林清。企画：原伸光。衣裳デザイナー：森英恵。洋裁店の縫い子に主人公にした物語。『笠原和夫傑作選 第3巻』の「笠原和夫作品リスト」の未映画化作品にこの作品があり、昭和36年8月執筆とある。
12	黒い氷河	1961	村山新治	井手雅人	原作：船山馨。企画：秋田亨。政財界の巨悪に挑む主人公の上杉喬太郎役に丹波哲郎との書き込みあり。シナリオは『キネマ旬報』1961年10月下旬号に掲載。
13	灰燼(かいじん)[準備台本]	1962	家城巳代治	松山善三	京都作品。原作：徳富蘆花。シナリオは『映画評論』1962年2月号に掲載。
14	時間の習俗[仮題][準備台本]	1962 ?	小林恒夫	井手雅人、大川久男	原作：松本清張。企画：岡田茂、登石雋一。製作意図に、『点と線』続篇ともいべき松本清張原作の『時間の習俗』を映画『点と線』(1958年)のコンビで描くとする。
15	おっぺけ野郎ダイナマイト騒動記[仮題][準備台本]	1963	深作欣二	福田善之、神波史男、小野竜之助	企画：小川貴也、矢部恒。『映画監督 深作欣二』(山根貞男共著、2003年)では、福田善之とは『真田風雲録』(1963年、東映京都、監督：加藤泰)で関係が出来たので、「オッペケペ」を題材に脚本作りを行なったが、『真田風雲録』の不入りで企画が頓挫とある(139頁)。シナリオ「オッペケペ」は『映画評論』1963年9月号に掲載、その前書きに「『オッペケペ』は、昨62年6月、芸術祭参加の候補に福田善之が書いたテレビドラマ台本を原作に、深作欣二監督・中村賀津雄主演の東映東京作品として3月中にクランク・インをめざして、昨年暮れから本年春にかけて書いた。撮入直前に急転して中止になった」とある。
16	東支那海の鮫[準備台本]	1960年代?	深作欣二	小川英	カラー作品。企画：太田浩児。小川英の脚本による深作作品はない。太田浩児企画による『北海の暴れ竜』(1966年)の頃か。
17	にっぽん秘録	1963	伊藤大輔	伊藤大輔	原作：中山正男「にっぽん秘録 安藤昭の生涯」。企画：亀田耕司、吉野誠一、植木輝男。音楽：伊福部昭。助監督：降旗康男。
18	髭を剃って殺そう[仮題][準備台本]	1960年代前半	[未記載]	寺山修司	企画：根津昇、加茂秀男、吉田達。冒頭に「即興詩的なギャング・カリカチュアのスタイルによるアクションドラマ」とある。ネットで検索しても寺山作品として見当たらない謎作品、寺山が映画と関わった初期の作品か。
19	誰かが地獄へ急いでる[準備台本]	1960年代	石井輝男	石井輝男	企画：植木照男。総天然色。主人公・其村伸に高倉健を配役。植木照男と石井輝男は「網走番外地」シリーズでコンビを組んでいるのでその前後の作品か。また植木は、片岡千恵蔵主演のアクション映画「地獄」シリーズの企画者の一人でもあるので、そのシリーズの一作か。

20	ダイヤと車(カー)とギャング[準備稿]	1967?	[未記載]	鈴木岬一	手書きの配役表あり、主役のロイスのジョーは丹波哲郎、天知茂、吉田輝雄が候補。「準備稿改訂の要点」と題した手書きメモあり。企画：吉野誠一、片桐譲、マキノ公哉。
21	満蒙馬賊伝[準備台本]	1960年代後半	[未記載]	松田寛夫、安部寿	企画：栗山富郎。登場人物は青竜山、片眼の斑狼など。
22	嵐をゆく[仮題][準備稿]		[未記載]	棚田吾郎、野波静雄	製作：岡田茂。企画：登石雋一、三堀篤、中曾根千治。東海大学の創立者・松前重義の青年時代から壮年期までを描く。
23	石狩平野[準備台本]	1968	田坂具隆	鈴木尚之	原作：船山馨。企画：今田智憲、栗山富郎。主人公の高岡鶴代役には佐久間良子を想定。シナリオは『キネマ旬報』1968年4月上旬号に掲載。栗山富郎は『キネマ旬報』1985年8月下旬号の「我等の生涯の最良の映画」で製作中止の経緯を語っている。
24	やどかり[仮題]	1974	中島貞夫	中島貞夫、金子武郎	京都作品。企画：日下部五朗、佐藤雅夫。
25	日本少林寺	1975?	鈴木則文	掛札昌裕、鈴木則文	第一部・地に潜む少林寺、第二部・天翔ける少林寺。企画：幸田清、太田浩児、深町秀熙。主人公は日本少林寺の開祖・宋道臣。主演は千葉真一。同じ宗道臣の生涯を描いた『少林寺拳法』(脚本：松本功、1975年2月公開)とは別作品。『権威なき権威 カントク野郎 鈴木則文』(2018年、ワイズ出版)に「企画が流れた作品」として記載(399頁)。
26	殺人拳への道	1976	山口和彦	中西隆三	企画：吉田達(とおる)。製作意図には「空手スター世界一、千葉“殺人拳”と我等の悦ちゃん、志穂美“女殺人拳”がコンビを組んで東南アジア最大の暗黒組織に敢然と挑戦する痛快空手アクション娯楽巨篇。インドネシアに初の大ロケーション敢行」とあるが、実現しなかった。千葉真一の役名は大和猛、志穂美悦子は疾風エツ子。
27	蟻地獄[仮題][準備用]		深作欣二	深作欣二、長田紀生	企画：太田浩児。登場人物は謎の女のしのぶ、実は狼の化身と、もとやくぎのガードマン矢吹。『映画監督 深作欣二』にも言及がない謎作品。
28	海燕ジョーの奇跡[準備用]	1980	深作欣二	松田寛夫、深作欣二	京都作品として企画。表紙に「幸田所長殿」の宛名書きがある。幸田清は東京撮影所長。企画：日下部五朗、本田達男。原作：佐木隆三。Wikipediaによれば主演の松田優作が松田寛夫の脚本を酷評したことなどが頓挫の原因。宣伝ポスターも作成されたとのこと。1984年、藤田敏八監督の同名作(三船プロ、松竹富士)とは別作品。
29	家族の神話[準備稿]	1981	山根成之(松竹)	渡辺千明	沖田浩之の第一回主演映画。製作：高岩淡。原作：阿久悠。企画：吉田達、海老名俊則(オフィス・トゥ・ワン)。プロデューサー：高村賢治、細野義朗(スターダスト・プロモーション)。
30	油断[準備稿]	1981	伊藤俊也	高田宏治	原作・総指揮：堺屋太一。企画：幸田清、天尾完次。プロデューサー：北本正孟、瀬戸恒雄。巻末に「ホルムズ海峡を封鎖するのは誰か 『油断』スタッフ特別研究レポート」あり。
31	[題名未記載][準備稿]	1983	舛田利雄	笠原和夫	企画：幸田清、天尾完次、太田浩児、瀬戸恒雄。『日本海大海戦 海ゆかば』(1983年)として映画化。

32	[題名未記載][準備稿]	1984	[未記載]	笠原和夫、野波静雄	「昭和の天皇」の第1稿と思われる。
33	昭和の天皇[準備稿]	1984	[未記載]	笠原和夫	表紙に「保存版/東撮企画」印。プロデューサー：天尾完次、太田浩児。資料構成：野波静雄。シナリオは『en-taxi』第29号(2010年4月20日発行)別冊付録に掲載。『笠原和夫傑作選 第3巻』に収録、昭和59年6月執筆、笠原のコメントとして「その筋の諒解とれず」とある。同著の伊藤彰彦による解題参照。それによれば、この企画は岡田茂の発案で、瀬島龍三の諒解も取り付けたが、昭和天皇顕彰会の川村理事長のクレームにより中止となったとある。
34	ながい旅[準備稿3]	1996	小泉堯史	小泉堯史	表紙の日付は1996年10月。原作：大岡昇平。2008年『明日への遺言』として映画化(脚本はロジャー・パルパースと共作)。
35	海援隊母に捧げるバラード[準備用]	1974	鈴木清順	佐々木守、内藤誠	企画：安斉昭夫。Wikipedia(「柳ヶ瀬ブルース」の項の「夜の歌謡シリーズ」のくだり)によれば、主演に予定された岡田裕介が脚本を読み、父の岡田茂にその酷さを訴えたことから中止になったとのこと。1980年にこのストーリーを活かした形で、内藤誠監督『時の娘』(原案：鈴木清順 脚本：佐々木守、内藤誠)として映画化された。



箱絵・原画「三代目一番星号」[『トラック野郎 望郷一番星』(1976年、シリーズ第3作)]



航空写真(1945年頃)



「警視庁物語」シリーズ第19作『第19号埋立地』(1962年)ロケハン写真



『飢餓海峡』美術資料



『新幹線大爆破』(1975年)ロケハン写真



旧第6ステージの Horizont の裏紙の新聞紙(1934年)

■映画資料保管状況（調査時）

・段ボール 18 箱（脚本・製作資料・写真・プレス資料・受賞品・個人資料ほか多数）

東映東京撮影所では、澤井信一郎監督の旧蔵資料を 2022 年の 1 月から暫定的に倉庫で保管していた。この資料は澤井監督逝去後の 2021 年に監督宅だったマンションが火災に遭い、焼失する寸前の状態からレスキューされたものである。ご遺族から連絡を受けた脚本家の荒井晴彦氏が東映東京撮影所に相談したことで、映画監督の隅田靖氏や東映取締役の小嶋雄嗣氏、同撮影所のスタッフが現場に駆けつけて資料を引き取るようになった。これはご遺族、仕事仲間、撮影所スタッフたちの、澤井監督の資料を遺したいという善意の賜物である。その後 2023 年の 6 月から 8 月にかけて本事業の調査で同撮影所に伺ったことがきっかけとなり、よりよい環境で保管され活用されることへの期待を受けて、澤井監督の資料は国立映画アーカイブに寄贈された。このように映画資料の散逸や消失を防ぐという本事業の意義が直接的に示されるケースとなった。

澤井監督は東映東京撮影所で 20 年間にわたり 58 作品の助監督を務めた異例の存在であり、『昭和残侠伝 死んで貰います』（1970 年、マキノ雅弘監督）や自身も執筆に携わった『トラック野郎 御意見無用』（1975 年、鈴木則文監督）の脚本が保存されていた。いずれも大量の書き込みがあり、日本映画史の名作が生み出された現場の状況をうかがい知ることができる貴重な資料である。自身が監督した映画については、作品ごとに脚本の準備稿や製作資料などが几帳面に整理されたうえで遺されている。さらに撮影現場や映画祭のスナップ写真、『早春物語』（1985 年）で受賞した第 26 回日本映画監督協会新人賞の記念品なども含まれる。また、家系図や子供の頃に熱中していたハーモニカまで大事に保存されていたことには驚かされる。その他にも川上弘美の小説『センセイの鞆』を田中陽造が翻案した未映画化の脚本など、基本的には公開されることのない希少な資料の存在が確認された。

本事業の枠で 2024 年 2 月に調布市文化会館たづくりの北ギャラリーで開催した展示では澤井信一郎監督のコーナーを設け、一部の資料を公開することができた。また 2023 年 12 月から 2024 年 3 月に開催した国立映画アーカイブの企画展「和田誠 映画の仕事」では、澤井監督が脚本に携わった『麻雀放浪記』（1984 年）の準備稿と絵コンテを澤井監督の旧蔵品から展示した。いずれも本事業を通して「発見」された資料が即座に活用されたケースとして特筆されるだろう。



『昭和残侠伝 死んで貰います』
（1970 年、マキノ雅弘監督）
撮影台本



撮影現場写真

実証展示（調布地区における資料展示）

実施概要

名称：令和5年度国立映画アーカイブ「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」展示
 “御意見無用！東映東京撮影所物語／関連展示：知られざる「日本映画博覧会」”
 日時：2024年2月10日（土）～18日（日）10:00～19:00／料金：入場無料
 会場：調布市文化会館たづくり 北ギャラリー-（〒182-0026 東京都調布市小島町2丁目33-1）
 主催：国立映画アーカイブ／運営：特定非営利活動法人映像産業振興機構
 提携：公益財団法人調布市文化・コミュニティ振興財団／協力：東映株式会社、
 株式会社東映京都スタジオ、本地陽彦氏、北九州市立松永文庫、木下恵介記念館、ナカバヤシ株式会社

▶概要

令和5年度の関東（練馬）地区及び東海地区の実地調査結果を元に、東映東京撮影所の歴史と日本映画博覧会をテーマに選び、キュレーションを行い、展示を実施した。前者では、東映東京撮影所で所在を確認した資料と国立映画アーカイブ所蔵資料や個人からの提供資料を組み合わせて、「トラック野郎」シリーズ等の人気作を生んだ東映東京撮影所の前史から現在にいたるまでの歴史の一端を紹介した。また後者では、国立映画アーカイブや個人所蔵の貴重な資料を通じて、1957年に愛知県・犬山市で開催されながら顧みられる機会の少ない巨大イベント「日本映画博覧会」の一端を紹介した。さらに本事業にてデジタル化した北九州市立松永文庫と木下恵介記念館所蔵資料のデジタルデータの一部を、タブレット端末で来場者が操作して閲覧できる形で展示した。

▶展示内容

各種映画資料（展示品リスト参照）及び令和5年度事業紹介[パネル／デジタル化資料の展示(タブレット端末)]

▶広報

VIPOではHP掲載やメール配信、プレスリリース、国立映画アーカイブではHP掲載やSNSによる告知を行った。また本年度は、東映株式会社より展示資料の提供に加え、広報室による告知の協力も受け、同社の社内ニュース及びHPやSNSによる外部への発信、またプレスリリースの発信が行われた。また調布シネマフェスティバルの広報物とは別に、本展示単体のチラシを作成し、関係施設や都内映画館等に配布した。

マスコミ媒体については、通信社1社、新聞社2社に展示概要のウェブ記事、出版社の旅行読売のウェブ記事に展示概要と取材記事（来場された故・澤井信一郎監督の親族へのインタビュー含む）が掲載された。

▶集計データ

総来場者数：2412人※（同会場で同時開催の別展示と共通受付での集計人数）※前年比約1.5倍の来場者数

▶アンケート結果より（一部紹介）

- ・毎年楽しみにしている方や初めての方で過去の本事業の展示も見なかったという、展示に満足あるいは期待する回答が得られた。
- ・展示内容について最も多く触れられていたのは「トラック野郎」シリーズ資料で、他にも澤井監督の手書きメモ類や「幻の映画企画」などの資料についてよかった、あるいは興味深かったという回答が得られた。

▶展示品リスト

※以下、各章名以外は、【 通し番号 | 資料名 | 所蔵元 】の順で記載

第1章 東映東京撮影所前史 新興キネマから太泉映画へ		
1	新興キネマ東京撮影所時代の「新聞紙」	東映東京撮影所
2	太泉映画『青空天使』（1950年）プレス（複製）	北九州市立松永文庫
3	新興キネマ東京撮影所の航空写真（1945年頃）	東映東京撮影所
第2章 『野良犬』から『警視庁物語』へ		
4	『野良犬』（1949年）脚本	個人蔵
5	『野良犬』完成披露特別試写会プログラム	個人蔵
6	『野良犬』プログラム	個人蔵
7	黒澤明研究会会誌 No.42 よりセットでの撮影風景	個人蔵
8	黒澤明研究会会誌 No.42 よりオープンセットでの撮影風景	個人蔵
9	『野良犬』（1949年）ポスター	個人蔵
10	『警視庁物語 十五才の女』（1961年）ポスター	東映太秦映画村・映画図書館
11	『警視庁物語 第19号埋立地』（1962年）ロケハン写真	東映東京撮影所
12	『警視庁物語 No.10,11』（1959年）脚本	東映東京撮影所
13	東映東京撮影所の航空写真（1957年頃）	東映東京撮影所
14	『米』（1957年）脚本	東映東京撮影所
第3章 第二東映からニュー東映、そしてギャング映画シリーズの興隆		
15	『危うしGメン 暗黒街の野獣』（1960年）ポスター	国立映画アーカイブ
16	『花と嵐とギャング』（1961年）撮影台本	国立映画アーカイブ（石井輝男監督旧蔵）
17	『花と嵐とギャング』（1961年）ポスター	国立映画アーカイブ
18	『東京ギャング対香港ギャング』（1964年）準備稿	国立映画アーカイブ（石井輝男監督旧蔵）
19	『誇り高き挑戦』（1962年）プレスシート	国立映画アーカイブ
第4章 「トラック野郎」シリーズ		
20	『トラック野郎 御意見無用』（1975年）ポスター	国立映画アーカイブ
21	『トラック野郎 御意見無用』（1975年）準備稿	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
22	『トラック野郎 爆走一番星』（1975年）脚本	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
23	『トラック野郎 危機一発』脚本（未映画化）	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
24	『トラック野郎 雪の下北・はぐれ鳥』脚本（未映画化）	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
25	『トラック野郎 男一匹桃次郎』（1977年）脚本	東映東京撮影所
26	『トラック野郎 突撃一番星』（1978年）脚本	東映東京撮影所
27	『トラック野郎 御意見無用』（1975年）ロケハン写真	東映東京撮影所
28	『トラック野郎 天下御免』（1976年）トラック検討写真	東映東京撮影所
29	ミニチュア一番星号 制作図面	石井良和氏
30	ミニチュア一番星号 写真	石井良和氏
31	ミニチュア一番星号 木型	石井良和氏
32	ミニチュア一番星号 タイヤ金型	石井良和氏
33	「三代目一番星号」箱絵原画	東映東京撮影所
34	「四代目やもめのジョナサン号」箱絵原画	東映東京撮影所
第5章 東映東京撮影所を支えた名監督・澤井信一郎（1938-2021）		
35	『昭和残侠伝 死んで貰います』（1970年）脚本	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
36	『昭和残侠伝 死んで貰います』（1970年）ポスター	個人蔵
37	『野菊の墓』（1981年）脚本	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）
38	『Wの悲劇』（1984年）脚本	国立映画アーカイブ（澤井信一郎監督旧蔵）

39	『Wの悲劇』(1984年)製作資料	国立映画アーカイブ(澤井信一郎監督旧蔵)
40	『Wの悲劇』(1984年)ロケハン写真	東映東京撮影所
41	『野菊の墓』(1981年)ポスター	国立映画アーカイブ
42	『Wの悲劇』(1984年)ポスター	国立映画アーカイブ
43	澤井信一郎監督・写真	国立映画アーカイブ(澤井信一郎監督旧蔵)
44	『蒼き狼 地果て海尽きるまで』(2007年)脚本	国立映画アーカイブ(澤井信一郎監督旧蔵)
第6章 幻の映画企画		
45	『霧の中』脚本(1956年)	東映東京撮影所
46	『草原の王者 大ジンギスカン』脚本(1957年)	東映東京撮影所
47	『おっぺけ野郎 ダイナマイト騒動記』脚本(1963年)	東映東京撮影所
48	『石狩平野』脚本(1968年)	東映東京撮影所
49	『海援隊 母に捧げるバラード』脚本(1974年)	東映東京撮影所
50	『昭和の天皇』脚本(1984年)	東映東京撮影所
51	『石狩平野』(未映画化)ポスター	国立映画アーカイブ
第7章 高倉健約20年振りの東映東京撮影所復帰作『鉄道員』		
52	『 ^{てつどうしん} 鉄道員』(1999年)トロフィー	東映東京撮影所
53	『 ^{てつどうしん} 鉄道員』(1999年)ポスター	国立映画アーカイブ
第8章 関連展示:知られざる「日本映画博覧会」		
54	「日本映画博覧会」企画書	国立映画アーカイブ(田中栄三旧蔵)
55	雑誌『平凡 日本映画博グラフ』	本地陽彦氏、国立映画アーカイブ
56	「日本映画博覧会」リーフレット	個人蔵
57	「日本映画博覧会 天然色絵はがき」9種	本地陽彦氏
58	「日本映画博覧会」記念バッジ	本地陽彦氏
59	「日本映画博覧会 講談社・愛読者特別割引御招待」ポスター	個人蔵
60	「平凡 日本映画博グラフ」中吊りポスター	個人蔵
第9章 東映東京撮影所の代表作・人気作		
61	東映社旗	東映東京撮影所
62	「大森坂」の写真が使用された所内案内資料	東映東京撮影所
63	『花札渡世』(1967年)ポスター	国立映画アーカイブ
64	『現代やくざ 人斬りと与太』(1972年)ポスター	国立映画アーカイブ
65	『直撃地獄拳 大逆転』(1974年)ポスター	国立映画アーカイブ
66	『網走番外地』(1965年)ポスター	国立映画アーカイブ
67	『新幹線大爆破』(1975年)凱旋版ポスター	国立映画アーカイブ
68	『新幹線大爆破』(1975年)脚本	東映東京撮影所
69	『新幹線大爆破』(1975年)ロケハン写真	東映東京撮影所
70	『新幹線大爆破』(1975年)チラシ	個人蔵
71	『帰ってきた女必殺拳』(1975年)ポスター	国立映画アーカイブ
72	『飢餓海峡』(1964年)ロケハン写真	東映東京撮影所
73	『飢餓海峡』(1964年)美術資料	東映東京撮影所
74	『女囚701号 さそり』(1972年)ポスター	国立映画アーカイブ
75	『五番町夕霧楼』(1963年)ポスター	国立映画アーカイブ
76	『網走番外地 悪への挑戦』(1967年)脚本	東映東京撮影所
77	『人生劇場 飛車角』(1963年)美術資料	東映東京撮影所
78	『不良番長 出たところ勝負』(1970年)ポスター	国立映画アーカイブ
79	『人生劇場 飛車角』(1963年)ポスター	国立映画アーカイブ

展示の様子



第1章 東映東京撮影所前史 新興キネマから太泉映画へ



第2章 『野良犬』から『警視庁物語』へ



第3章 第二東映からニュー東映、
そしてギャング映画シリーズの興隆



第4章 「トラック野郎」シリーズの興隆



第5章 東映東京撮影所を支えた名監督・澤井信一郎



第6章 幻の映画企画



第7章 高倉健約20年振りの東映東京撮影所復帰作『鉄道員』



第8章 関連展示：知られざる「日本映画博覧会」



第9章 東映東京撮影所の代表作・人気作①



第9章 東映東京撮影所の代表作・人気作②



デジタル展示



展示チラシ

デジタルアーカイブ実証研究（映画資料のデジタルアーカイブ化）

○平成 30 年度～令和 4 年度（文化庁委託事業として実施）

■概要

文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）では、映画資料の保存と活用の調査研究として、保存・修復措置、デジタルアーカイブの作成と活用を行ってきた。映画資料アーカイブにおいて、それらは喫緊の課題であり、本事業を通じて実践例を重ねることで、本事業の成果が直接的に、また事例の共有が参考例となり間接的にアーカイブの推進に繋がることを期待している。以下が、その実績の一覧である。

令和 4 年度までの映画資料の収集・保存・展示方法に関する実績

年度	実施内容	協力所蔵館	詳細・補足
平成 30	1.ポスター、映画脚本に対する 保存修復手当て 2.映画脚本の脱酸化処置	東映太秦映画村	1.点数=B2 ポスター3 点、映画脚本 3 点 2.点数=735 点
令和元	映画スクラップブックの保存 修復手当て及び電子化	松竹大谷図書館	点数=映画スクラップブック 31 冊（約 1,235 カット）
令和 2	ポスター及びプレスシートの デジタルアーカイブの作成及 び JFROL への搭載実験	① 東映太秦映画村・映画図書館 ② 松竹大谷図書館	①東映 70 周年記念作品、深作欣二監督、高倉健主演、岩下志麻主演作品 ②小津安二郎、木下恵介、野村芳太郎、黒澤明（『白痴』）、深作欣二監督作品 ①②合計点数=ポスター：652 点、プレスシート：1212 点
令和 3	デジタル展示実施のためのデ ジタルアーカイブ作成	① 東映太秦映画村・映画図書館 ② 松竹大谷図書館	①甲斐荘楠音参加、中島貞夫、内田吐夢監督作品 ②野村芳太郎、大島渚、小林正樹、渋谷実、川島雄三監督作品 ①②合計点数=ポスター：324 点、プレスシート：39 点
令和 4	映画脚本のデジタルアーカイ ブ作成	① 東映太秦映画村・映画図書館 ② 松竹大谷図書館	①田中省三氏（撮影技師）旧蔵脚本等（溝口健二監督作品関連）、田中美佐江氏（スクリプター）旧蔵脚本（深作欣二監督作品関連）、依田義賢脚本作品の手書き原稿 ②小津安二郎、溝口健二、黒澤明監督、その他作品の準備稿や検閲台本等 ① ②合計点数=80 点

現物資料の保存修復措置に始まり、映画資料のデジタル化、さらにデジタルデータを映画資料所在地情報検索システム（JFROL）に期間限定で搭載したり、デジタル展示に活用したりすることを実践してきた。デジタル化対象資料は、ポスターやプレスシートといった宣伝資料からそれらが貼付されたスクラップブック、また国内で事例の少ない映画脚本にまで範囲を広げてきた。デジタル化のメリットは、現物資料の損傷リスクを軽減する他に、技術的にオンライン公開・送付が可能になること、資料内容の確認の容易化、拡大して細部を確認できるなど多数ある。

■対象資料館について

事業初期から東映太秦映画村及び同映画図書館（令和 2 年開設）と松竹大谷図書館にご協力をいただいていた。映画資料所在地情報検索システム（JFROL）にデータベースを連携しており、いずれも豊富な映画資料の所蔵館である。対象資料の選定においては、保存目的においては状態の劣化具合や貴重性、活用目的においては知名度や利用頻度の高さなどを考慮している。

○令和 5 年度の実績

■概要

国立映画アーカイブ事業となった令和 5 年度は、さらに映画資料の保存と活用の調査研究を進めるために、JFROL の協力所蔵館以外の新たな資料館の所蔵資料を対象に、貴重性や劣化進行のリスク等を考慮して選定した映画資料のデジタル化を行った。デジタル化のメリットは、劣化が進行する前の状態を記録し、そのデジタル画像を利用することで現物損傷のリスクを減じ、また館内や館外(HP 等含む)での利用機会を増やして活用の幅を広げられることである。所蔵資料のデジタル化に関心を持ちながら着手できずにいる資料館を対象とすることで、映画資料の保存と活用を促し、アーカイブ中核拠点の形成を目指した。

■対象資料館

資料の貴重性及び劣化状況、また館の取り組みを考慮して、以下の 2 館の所蔵資料を対象とした。

①北九州市立松永文庫

松永武氏と中村上氏のコレクションにより戦前から戦後までの膨大な映画資料を所蔵している。同館は、企画展や、HP での所蔵資料紹介、JFROL への連携など、積極的に映画資料の活用・公開を行っている。

同館が所蔵する北九州市・門司区の劇場プログラム等は、地域の貴重な文化資料である。かつてのその地域における映画館及び上映作品の記録は、貴重な映画興行の記録であり、その地域でどのように映画が受容されていたかを伺い知ることができる文化史的記録である。それらは現存数が少なく、脆弱な紙資料であるため劣化が進行している。当該資料をデジタル化することで、現存状態を記録し、研究や展示などで活用する機会（館内だけでなく同館 HP での館外への所蔵資料紹介等含む）を広げられた。

② 木下恵介記念館

静岡県・浜松市出身の著名な映画監督である木下恵介の遺品等を所蔵している。同館は、資料展示や映画上映を通して地元の映画人の顕彰活動を続けている。2023年に京都市にあるおもちゃ映画ミュージアムで木下恵介展を実施するなど、地域を越えた積極的な活動も行っている。

同館が所蔵する著名な映画監督である木下恵介の使用台本は、同氏の創作過程の痕跡が残る貴重な資料である。例えば、撮影台本の書き込みを調査することで、現場で脚本がどのように映画として具現化されたかを伺い知ることができる。それらは幾度も手に触れられ劣化が進行し、一部挟み込み資料については損失のリスクがある資料でもある。当該資料をデジタル化することで、現存状態を記録し、研究や展示などで活用する機会を促進させた。展示においては、現物脚本は見開きで2ページしか一度に展示できない制約があるが、デジタルデータは電子媒体上で複数のページを表示することもでき、展示スペースの限られた館内での今後の活用可能性を広げられた。

■対象資料

1.北九州市立松永文庫所蔵

- ・戦前の下記地域の映画資料（劇場プログラム、宣材等(紙)、業務関連、ポスター）
北九州：1088点／福岡：301点
- ・令和5年度展示検討用：3点

2.木下恵介記念館所蔵

映画脚本：14点(木下恵介監督の書き込みがあったり、劣化進行の恐れがあったりする資料)

■作業期間

2023年12月～2024年2月

■対象資料リスト

1.北九州市立松永文庫デジタル化資料リスト

	種別	資料名1	備考(地域等)	点数
1	劇場プログラム	本川座（門司市本川町）1920年開館	北九州	27
2	宣材等（紙）	本川座（門司市本川町）1920年開館	北九州	3
3	社報／会報	本川座（門司市本川町）1920年開館	北九州	1
4	劇場プログラム	凱旋座（大阪町）1920年芝居小屋から活動常設館へ	北九州	1
5	宣材等（紙）	旭座（門司市日出町）1923年芝居小屋として開館	北九州	8
6	宣材等（紙）	メカリ館（門司市東川端町）1921年開館	北九州	55
7	業務関連	メカリ館（門司市東川端町）1921年開館	北九州	1
8	劇場プログラム	メカリ館（門司市東川端町）1921年開館	北九州	71
9	宣材等（紙）	早鞆倶楽部 ※メカリ館が1924-25年の間改称	北九州	40
10	劇場プログラム	早鞆倶楽部 ※メカリ館が1924-25年の間改称	北九州	74

11	劇場プログラム	松竹座 ※メカリ館から松竹倶楽部・松竹座へ改称	北九州	2
12	宣材等(紙)	松竹座 ※メカリ館から松竹倶楽部・松竹座へ改称	北九州	2
13	宣材等(紙)	永真館(門司市日ノ出町) 1913年開館	北九州	5
14	社報/会報	永真館(門司市日ノ出町) 1913年開館	北九州	10
15	宣材等(紙)	松濤館(門司市大里) 1920年開館	北九州	1
16	劇場プログラム	世界館(門司市内本町) 1913年開館	北九州	24
17	宣材等紙	世界館(門司市内本町) 1913年開館	北九州	8
18	劇場プログラム	旭座(若松市)	北九州	40
19	劇場プログラム	若松キネマ(若松市)	北九州	263
20	宣材等(紙)	若松キネマ(若松市)	北九州	29
21	劇場プログラム	若松倶楽部(若松市)	北九州	10
22	宣材等(紙)	若松倶楽部(若松市)	北九州	2
23	劇場プログラム	喜楽館(若松市)	北九州	2
24	劇場プログラム	館不明(若松市)	北九州	2
25	劇場プログラム	松竹館(小倉市)	北九州	171
26	宣材等(紙)	松竹館(小倉市)	北九州	7
27	劇場プログラム	迎陽館(小倉市)	北九州	36
28	宣材等(紙)	迎陽館(小倉市)	北九州	6
29	劇場プログラム	公楽座(小倉市) ※迎陽館改め	北九州	33
30	劇場プログラム	光映画劇場(小倉市)	北九州	53
31	劇場プログラム	喜楽館(小倉市)	北九州	10
32	宣材等(紙)	喜楽館(小倉市)	北九州	1
33	劇場プログラム	喜楽館(小倉市)	北九州	15
34	宣材等(紙)	喜楽館(小倉市)	北九州	8
35	劇場プログラム	常盤座	北九州	13
36	宣材等(紙)	常盤座	北九州	1
37	劇場プログラム	記念館(八幡市)	北九州	28
38	劇場プログラム	大丸館(八幡市)	北九州	23
39	宣材等(紙)	大丸館(八幡市)	北九州	1
40	宣材等(紙)	キネマ館(八幡市)	北九州	1
41	劇場プログラム	東亜倶楽部(博多)	福岡	19
42	宣材等(紙)	東亜倶楽部(博多)	福岡	1
43	ポスター	東亜倶楽部(博多)	福岡	1
44	劇場プログラム	抜天(バッテン)館(博多)	福岡	17
45	ポスター	抜天(バッテン)館(博多)	福岡	6

46	劇場プログラム	抜天（バッテン）館（博多）	福岡	2
47	ポスター	壽座（博多）	福岡	8
48	劇場プログラム	壽座（博多）	福岡	5
49	劇場プログラム	壽座（博多）	福岡	1
50	劇場プログラム	壽座（博多）	福岡	26
51	劇場プログラム	喜楽館（博多）	福岡	39
52	ポスター	喜楽館（博多）	福岡	9
53	劇場プログラム	喜楽館（博多）	福岡	5
54	劇場プログラム	日活館（博多）	福岡	32
55	劇場プログラム	帝キネ倶楽部（博多）	福岡	22
56	ポスター	帝キネ倶楽部（博多）	福岡	6
57	劇場プログラム	帝キネ倶楽部（博多）	福岡	2
58	劇場プログラム	友楽館（博多）	福岡	52
59	宣材等（紙）	友楽館（博多）	福岡	2
60	ポスター	友楽館（博多）	福岡	16
61	劇場プログラム	友楽館（博多）	福岡	22
62	宣材等（紙）	友楽館（博多）	福岡	1
63	劇場プログラム	帝国館（博多）	福岡	7
64	宣材等（紙）	太泉映画『狼人街』	展示検討用	1
65	宣材等（紙）	太泉映画『青空天使』	展示検討用	1
66	写真	太泉映画撮影所	展示検討用	1

計 1392

2.木下恵介記念館デジタル化資料リスト

	資料種別	資料名	備考	点数
1	映画脚本	『女』	赤ペンで書き込みあり	1
2	映画脚本	『婚約指輪（エンゲージ・リング）』	書き込みあり	1
3	映画脚本	『海の花火』	書き込みあり	1
4	映画脚本	『二十四の瞳』	木下恵介が演出する際に使用した	1
5	映画脚本	『太陽とバラ』	木下恵介書き込みあり	1
6	映画脚本	『喜びも悲しみも幾歳月』	書き込みあり	1
7	映画脚本	『この天の虹』①	少々書き込みあり	1

8	映画脚本	『この天の虹』②	少々書き込みあり	1
9	映画脚本	『風花』	書き込みあり	1
10	映画脚本	『今日もまたかくてありなん』	書き込みあり	1
11	映画脚本	『春の夢』	少々書き込みあり	1
12	映画脚本	『永遠の人』	書き込み後ろにあり	1
13	映画脚本	『新・喜びも悲しみも幾歳月』	自筆	1
14	映画脚本	『スリランカの愛と別れ』 <決定稿>	目立った書き込みなし・p138 に修正あり	1

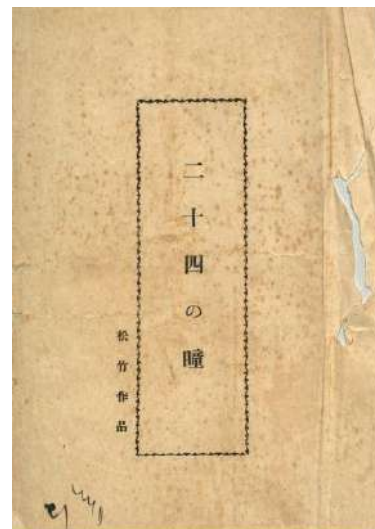
計 14

■ デジタル化資料画像例

劇場プログラム 本川座（門司市本川町）1920年開館
（北九州市立松永文庫所蔵）



映画脚本 『二十四の瞳』
（木下恵介記念館所蔵）



映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の一般公開と新規連携

○平成 30 年度～令和 4 年度（文化庁委託事業として実施）

■映画資料所在地情報検索システム(JFROL)の概要と開発実績

研究や展示キュレーションあるいは旧作関連資料の活用等のために、各資料所蔵館に個別に問い合わせをして映画資料を探すことは労力を必要とする。どこにどんな映画資料が所蔵されているかという映画資料の所在地情報にすぐにアクセスできるようになれば、映画資料はより利用しやすくなる。近年、博物館や図書館データベースで拡大している横断検索システムのコンセプトを映画資料データベースに取り入れて開発したのが映画資料所在地情報検索システム (JFROL) である。以下が、JFROL の開発実績の一覧である。

JFROL 年度別実施概要（平成 30 年度～令和 4 年度事業まで）

事業年度	実施概要	連携所蔵館	資料種別	データ件数
平成 30	・旧・東映太秦映画村 DB の調査 ・所蔵資料のリスト化			
令和元	・松竹大谷図書館 DB と接続するための課題の整理（旧称 NFA としての実証実験） ・東映太秦映画村 DB の改修			
令和 2	・ベータ版として限定公開（連携＝計 2 館） ・サムネイル画像の搭載（限定公開期間のみ）	東映太秦映画村・映画図書室 松竹大谷図書館	計 7 種＝シナリオ、ポスター、プレス資料等、パンフレット、チラシ、スチル写真等、その他	約 7 万件
令和 3	・新規連携（連携＝計 3 館）	川喜多記念映画文化財団	計 9 種＝上記種別+図書、雑誌	約 10 万件
令和 4	・新規連携（連携＝計 5 館） ・一般公開の実証実験(2023 年 1 月 19 日～3 月 31 日まで)	北九州市立松永文庫 早稲田大学演劇博物館	計 10 種＝シナリオ、ポスター、宣材等(紙)、パンフレット/プログラム、チラシ、スチル写真等、図書、雑誌、業務関連、その他 ※その他に検索機能の追加：資料発行年による検索機能の追加	約 18 万件

上記のように平成 30 年度の文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における非フィルム資料）」の開始当初から構想が始まり、最初に起点となった東映太秦映画村のデータベースの調査、令和元年度に改修した同館データベースと松竹大谷図書館との連携にあたっての課題整理、そして令和 2 年度にベータ版として JFROL が誕生し、同時に両館及び東映・松竹の協力により各資料のサムネイル画像搭載の実証実験（限定公開期間のみ）も行った。それから令和 3 年度に川喜多記念映画文化財団、令和 4 年度に北九州市立松永文庫と早稲田大学演劇博物館の一部のデータベースが連携し、計 5 館のデータベースが横断検索できる状態で一般公開の実証実験を行った。

資料種別は、令和 2 年度時点では、当時の連携資料の種別に合わせて、「シナリオ」、「ポスター」、「プレス資料等」、「パンフレット」、「チラシ」、「スチル写真等」、「その他」の 7 種を設定した。さらに

令和 3 年度の川喜多記念映画文化財団のデータベースの連携時に、「図書」、「雑誌」の資料種別を追加した。令和 4 年度には、連携する北九州市立松永文庫の所蔵資料に従来の資料種別では分類し難い資料があったため、種別の追加と名称の見直しを行い、「シナリオ」、「ポスター」、「宣材等(紙)」、「パンフレット／プログラム」、「チラシ」、「スチル写真等」、「図書」、「雑誌」、「業務関連」、「その他」の計 10 種へと詳細な分類を実施した。これは各連携データベースの資料種別ごとに JFROL の資料種別とのマッピングを行い、同時に図書館における日本十進分類法のような一般的分類法が未確定である映画資料のより利便性の高い分類方法について試行錯誤した結果である。各館別に映画資料の分類を行っているが、北九州市立松永文庫のデータベースでは、JFROL との連携に際して、資料分類とその定義の見直しを図りデータを再分類した。また同館のデータベースは、同館 HP などでは公開しておらず、他の連携データベースとは異なり JFROL との連携によってはじめて外部に一般公開された。また再度アンケートを実施し、検索機能の追加として望まれた資料の発行年による検索機能も追加した。ベータ版公開から一般公開にいたるまでには、映画資料の利用者（研究者、資料館職員、編集者等）へのアンケートにより、効果検証の実施と改善要望を募った。その結果から令和 4 年度事業にて、年代検索機能を追加した。

本システムでは、検索ワードに関連した映画資料の名称、種別、所蔵館が一覧で表示され、各資料の詳細画面では、お問い合わせ先とお問い合わせ方法が表示されるようになっている。本システムは連携館の追加や改修を経てより簡単に資料の所在地情報が得られるようになり、研究や展示キュレーションあるいは旧作関連資料の活用等において映画資料がより活用されやすくなった。

○令和 5 年度実施内容

以下の 1、2 を実施した。

1. 一般公開（正式オープン）

2023 年 7 月 4 日に一般公開（正式オープン）させた。それにより同時点で計 5 館の映画資料所蔵館の連携データベースを誰でも横断検索可能になった。

2. 調布市立図書館 DB の連携

■協力所蔵館概要

○調布市立図書館 住所：〒182-0026 調布市小島町 2-33-1 調布市文化会館たづくり 4-6 階

同館については、令和 2、3 年度の文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における非フィルム資料）」にて所蔵資料の調査を実施した。調布市は、市内に多数の撮影所や映画関連会社がある「映画のまち」であり、館内には多数の映画書籍等を利用できる「映画資料室」を設けている。調査結果の詳細については、各年度の報告書をご参照いただきたい。ここに一部だけ紹介すると、所蔵資料には、大映の録音技師であった須田武雄氏の使用台本（小津安二郎監督作品『浮草』他）、日活の編集技師であった鈴木暁氏の使用台本、同じく日活の美術監督であった菊川芳江氏による美術図面やスケッチ等が所蔵されている。その調査成果の一部は令和 3 年度事業の展示で紹介した。

○所蔵資料

(※以下は調布市立図書館 HP にて検索可能な資料)

- ・映画関連書籍：約 26,000 冊
- ・パンフレット：約 3,000 タイトル
- ・撮影台本：約 3,000 タイトル
- ・映画関連雑誌：115 タイトル

(※以下は HP に掲載していない資料)

- ・映画ポスター 約 3,370 点（うちデジタル化済の館内公開分が約 3,100 点）
- ・スチル写真 約 8,100 枚
- ・ロビーカード 約 1,800 枚
- ・チラシ 約 22,400 枚

■実施概要

調布市立図書館 HP にて公開している同館所蔵の映画資料データ（資料種別＝シナリオ、パンフレット／プログラム、図書、雑誌）を、JFROL に自動連携させた。

手順

1. 調布市立図書館が採用している CLIS（読み＝シリーズ。株式会社サン・データセンターが開発した統合図書館システム）の登録データから映画資料のデータのみを抽出して出力する。
2. 調布市立図書館から抽出したデータを JFROL に取り込んで資料種別を対応させて反映させる。

1. 出力プログラムの開発

調布市立図書館のデータベースに登録されている全所蔵資料データの中から、資料区分と別置記号によって「映画資料」のデータのみを抽出して出力する。

- ・資料区分＝「1：図書」or「2：雑誌」
- ・別置記号＝「M：M（映画）」

次に同別置記号のデータから資料区分及び NDC（日本十進分類法）の番号と JFROL の資料種別の対応を設定する。

抽出データ資料区分対応表

CLIS 出力データ			JFROL
資料区分	NDC	(種別)	資料種別
図書	778.5	(映画脚本)	シナリオ
図書	674.7	(映画プログラム)	パンフレット/プログラム
図書	上記以外	(映画図書)	図書
雑誌		(映画雑誌)	雑誌

○出力データ例

図書、雑誌の登録項目から連携に必要な出力項目を指定し、それぞれ JFROL 上での「項目表示」と「検索可否」を設定した（左側の「基本情報」は、調布市立図書館 HP 上の画面）。

・図書

基本情報

書名	浮草 (ウキクサ)
著者名	野田高梧脚本 小津安二郎脚本 小津安二郎監督
出版社	大映
出版年月	1959.
ページ数	e-22p
大きさ	25cm
一般件名	映画-脚本
NDC8	778.5
資料形態	図書
言語	日本語
マーク言語	jpn
マークNo.	T90485392
書誌番号	000844823

出力項目一覧(図書)

調布	JFROL	
	項目表示	検索可否
項目		
書名	表示	検索可
著者名	非表示	検索可
出版社	非表示	検索可
出版年月	表示	検索可
NDC	非表示	非検索
書誌番号	非表示	非検索

- ・「出版年月」は、「出版年」のみ出力
- ・「NDC」は、分類のため出力
- ・「書誌番号」は、個別 ID のため出力

・雑誌

基本情報

誌名	キネマ旬報
巻号	26/06/01 1926.06.01 S229
発行所	キネマ旬報社
刊行頻度	月刊
誌名の注記	1946/03~1950/04(復刊1号)~2023.7.20発売号から月1回(毎月20日)の発行
各号の注記	価格30銭
特集名	日本活動写真株式会社 広告
分野	映画関係の雑誌
利用対象	一般
保存期限	永久保存
資料形態	雑誌
言語	日本語
雑誌コード	20721
書誌番号	000891249

年月日号/発行日/通巻

JFROL 上の表記名：

「誌名+年月日号」 = 「キネマ旬報 26/06/01」

出力項目一覧(雑誌)

調布	JFROL	
	項目表示	検索可否
項目		
誌名	表示	検索可
巻号(年月日号)	表示	非検索
発行所	非表示	検索可
発行日	表示	検索可
特集名	非表示	検索可
書誌番号	非表示	非検索

2.項目マッピング

各資料種別の項目と JFROL 上での表記項目をマッピングさせた

項目マッピング一覧表

調布市立図書館

JFROL 上の項目	映画脚本	映画プログラム	図書	雑誌
作品名／資料名	書名	書名	書名	誌名+年月日号
フリガナ	書名(カナ)	書名(カナ)	書名(カナ)	なし
製作年／発行年	出版年月	出版年月	出版年月	発行日（発行年のみ抽出）
資料種別	シナリオ	パンフレット ／プログラム	図書	雑誌
所蔵館	調布市立図書館	調布市立図書館	調布市立図書館	調布市立図書館
「資料詳細情報」の「種別」	映画脚本	映画プログラム	映画図書	映画雑誌

5.まとめ

令和 5 年度事業で JFROL の一般公開を開始し、誰もが同システムを利用できるようになった。また新たに調布市立図書館の映画資料データベースが連携し、約 23 万件の映画資料の横断検索が可能となった。

参考資料

- ・「映画資料所在地情報検索システム (JFROL)」

URL : <https://jfrol.jp/>

- ・トップページ



全国映画資料アーカイブサミット 2024

○平成 30 年度～令和 4 年度（文化庁委託事業として実施）

全国の映画資料関係者（所蔵館、研究者、IP ホルダー等）のネットワーク形成を促し、望ましい映画資料アーカイブの構築に向けて議論を深めるために、文化庁委託事業「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」（撮影所等における映画関連の非フィルム資料）ではイベント（セミナーやシンポジウム）を開催してきた。平成 30 年度の「セミナー&シンポジウム」では映画資料の保存に関するセミナーと、保存・修復がテーマのシンポジウムを実施し、翌年の令和元年度から「全国映画資料アーカイブサミット」と銘打ち、毎年趣向を変えて映画資料アーカイブに係る様々なプログラムを実施してきた。セミナーや事例の共有、議論の展開によって、映画資料の保存・活用・収集に係る様々な観点から映画資料アーカイブの理解を深めて、その活動の深化・活性化を促進してきた。以下が、過去のイベントの一覧である。

「セミナー&シンポジウム」及び「全国映画資料アーカイブサミット」実施実績一覧

種類 登壇者 年度 開催方法	報告・プレゼンテーション・発表	セミナー、トーク	セミナー（著作権等）	シンポジウム
平成 30 年度 (第 0 回) フィジカル		「映画資料の特性を生かした修復・保存について」 資料保存器材		「映画資料の保存・修復における今後の展望」 株式会社東映京都スタジオ/国立映画アーカイブ/国立新美術館/京都大学大学院
令和元年度 (第 1 回) オンライン	「映画資料所蔵館による自館紹介」 株式会社東映京都スタジオ/松竹大谷図書館/調布市立図書館	「保存対策と防災」 日本図書館協会資料保存委員会	「映画資料のアーカイブと公開に関する権利の課題」 弁護士	「映画資料所蔵館の課題の共有とその改善」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：株式会社東映京都スタジオ/松竹大谷図書館/調布市立図書館
令和 2 年度 (第 2 回) オンライン		「映画宣材の制作について」 元松竹株式会社宣伝部長 「展示キュレーションについて」 川喜多記念映画文化財団 「デジタル展示について」 株式会社アイ・ティー・ワン	「映画資料のアーカイブと公開に関する権利処理と最新動向」 弁護士	「映画資料をめぐる現状とその課題—全国ネットワーク化に向けて」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：東映京都スタジオ/調布市中央図書館/神戸映画資料館
令和 3 年度 (第 3 回) オンライン	「データベース/デジタルアーカイブの構築と活用—映画資料所在地情報検索システム (JFROL) の事例を元に—」 事務局、国書刊行会/川喜多記念映画文化財団/東映株式会社 「映画資料にまつわる最前線の活動発表」 映画関係の発行物に携わる個人、有志団体	「映画資料の展示（リアル/オンライン）について」 静岡文化芸術大学図書館・情報センター/国立映画アーカイブ/株式会社アイ・ティー・ワン	「映画資料の NFT 化・デジタル活用と著作権処理」 弁護士	「映画資料の収集・保存・活用—全国的な連携からできること」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：東映株式会社/崑プロ/鎌倉市川喜多映画記念館/映画研究者
令和 4 年度 (第 4 回) オンライン	「映画資料所在地情報検索システム (JFROL) の新たな展開」 事務局、北九州市立松永文庫 「映画館の視点—映画館が独自に制作する広報物と観客とのコミュニケーション」 映画館担当者	「映画宣伝デザイナーの視点—映画への道しるべ」 映画宣伝デザイナー 「映画資料のデジタル化に関する基礎知識—非フィルム資料（台本等）の電子化」 ナカバヤシ株式会社	「ゲーム・舞台・音楽など隣接分野のアーカイブの動向と映画資料の著作権処理と最新潮流」 弁護士	「映画資料を文化的リソースに—関係者の連携強化と今後の展開」 モデレーター：国立映画アーカイブ パネリスト：世田谷文学館/北九州市立松永文庫/木下恵介記念館/北の映像ミュージアム/京都大学大学院

○全国映画資料アーカイブサミット 2024

■開催概要

【日程】2024年1月26日（金）10:30～17:00

【形式】オンライン開催

映画資料に関する知識を深めるとともに、その保存・活用の円滑化や関係者・諸機関の連携強化をはかることを目的に実施。5回目の開催となる今回のサミットでは、望ましい映画資料アーカイブの構築に向けてさらに議論を深めるべく、地域連携をテーマにしたシンポジウム、映画館の歴史調査に沿った資料アーカイビングや映画分野の展覧会キュレーションに関する発表など多様なプログラムを実施した。

■実施結果

出席者：193名

各部視聴者数：	第1部	123名
	第2部	133名
	第3部	140名
	第4部	155名
	第5部	144名
	第6部	144名

■第1部：報告

データベース「映画資料所在地情報検索システム（JFROL）」の新規連携

▶登壇者

JFROLと調布市立図書館の映画資料データベースの連携

事務局 佐藤友則

事務局からJFROLの簡単な開発経緯の説明の後に、令和5年度事業で新規にデータベース連携する調布市立図書館の施設紹介、所蔵資料

概要、連携データベースの概要、連携に際しての手続き等を説明した。

■第2部：報告

「映画資料をめぐる国立映画アーカイブの新たな取り組み」

▶登壇者

1.重複する映画資料の頒布事業

宮本 法明（国立映画アーカイブ研究員）

2.ウェブサイト「映画遺産—国立映画アーカイブ映画資料ポータル—」の開設

岡田 秀則（国立映画アーカイブ主任研究員）

国立映画アーカイブで2023年度より開始した2つの取り組みについて発表した。最初に宮本が全国の映画資料館を対象にした重複する映画資料の頒布事業について、その概要、現在の対象資料、実績について発表した。次に岡田が新たな映画資料ポータルサイト「映画遺産—国立映画アーカイブ映画資料ポータル—」について、国立アトリサーチセンターの協力により国立情報学研究所と共同制作した同サイトの概要、現時点での内容説明や今後の展開について発表した。



■第3部：報告

「映画資料展—2023年現地報告」

▶登壇者

1.甲斐荘楠音の全貌 絵画、演劇、映画を越境する個性

（会場：京都国立近代美術館、東京ステーションギャラリー）

登壇者：山口 記弘氏（東映株式会社・経営戦略部フェロー）

2.娯楽映画の黄金時代・日欧映画交流

（会場：インスティトゥト・セルバンテス東京）

登壇者：ダニエル・アギラル氏（映画史研究家、翻訳家）

3.「日本アニメーションの父」政岡憲三とアニメーションの現在

（会場：帝京大学総合博物館）

登壇者：堀越 峰之氏（学芸員）

▶内容

コロナ禍をようやく脱した2023年に盛んに開催された映画資料展の中から、時代劇衣裳にも本格的に関わった日本画家の展覧会、特撮・SF・恐怖映画に特化した日本映画の欧州版ポスターや欧州の日本版ポスターの展示、日本の古典作品を主とし現在の作品へとつながるアニメーション史の展覧会について、各展示関係者からそれぞれの資料展の開催経緯や内容、映画資料を魅力的に見せる工夫、問題点等を報告していただいた。



■第4部：セミナー

「映画資料と著作権～文化的活用とデジタルアーカイブをめぐって」

▶講師

五常総合法律事務所 パートナー弁護士
数藤 雅彦氏

▶内容

ポスターやスチル写真などの宣伝材料、シナリオ、映画美術などの製作関連資料、映画人・映画団体の資料など幅広い内容を含む映画資料の文化的活用を考える際に留意しなければならない著作権等の法律について、映画関係の事例にも詳しい数藤弁護士に講義していただいた。各資料別の活用例における、著作権、所有権、肖像権・パブリシティ権等の権利処理、また最近の著作権法改正の動向について解説していただいた。最後に視聴者からの質疑応答も実施した。



■第5部：セミナー

「映画資料最前線—映画館文化発掘の試み」

▶登壇者

1.かつてそこに映画館があった-「消えた映画館の記憶」について

澤田 佳佑氏（サイト「消えた映画館の記憶」管理人）

2.鳥取県の映画文化研究-映画資料が語る地方の映画文化史

佐々木 友輔氏（鳥取大学地域学部准教授）、杵島 和泉氏（鳥取大学地域学部）

▶内容

映画作品にまつわる資料に限らず、近年盛んな映画館文化の掘り起こしに寄与する資料への理解を深める事例として、2つの活動について発表していただいた。まずウェブサイト「消えた映画館の記憶」管理人の澤田氏には、失われた全国各地の映画館の概況から、文献資料及び現地調査の方法と実績、消えた映画館の記憶を残す意義などについてお話しいただいた。次に、鳥取大学をベースに鳥取県の映画文化リサーチプロジェクト「見る場所を見る」を実施されてきた佐々木氏と杵島氏に、地方における資料調査の課題とそれを解消するための「イラストレーション・ドキュメンタリー」という方法、展示の実績や今後の展望についてお話しいただいた。最後に視聴者からの質疑応答も実施した。



■第6部：シンポジウム

「映画資料アーカイブと地域連携—その可能性を探る」

▶登壇者

パネリスト：

小津安二郎松阪記念館 | 岩岡 太郎氏 (研究員)

茅ヶ崎ゆかりの人物館 | 加藤 厚子氏 (運営アドバイザー)

羽島市映画資料館 | 近藤 良一氏 (相談役)

神戸映画資料館 | 田中 晋平氏 (研究員)

モデレーター：

国立映画アーカイブ | 岡田 秀則 (主任研究員)

▶内容

今回は「地域連携」をテーマにシンポジウムを実施した。しばしば豊かな地域性を持つ映画資料のアーカイブにとって、それぞれの地域社会との連携は欠かすことのできない重要な事項である。地元コミュニティや地域の企業、研究者、コレクター、映画ファンなどとのつながりは、映画資料アーカイブの諸活動を促し、未来の有機的運営の促進につながる。

まず全国各地の映画資料館の登壇者にそれぞれの館の取り組みや課題について発表いただいた。各館の発表の概要は次の通りである。

- ① 小津安二郎松阪記念館…取り組み＝松阪市で青春期を過ごした小津安二郎関連の資料展示や上映会、ワークショップなど／課題＝学校や小津に縁のある県内他市との連携など。
- ② 茅ヶ崎ゆかりの人物館…取り組み＝館と市民が協働した地域文化の調査、2023年の企画展の紹介／課題＝地域連携の仕組み作り、関係性の構築、収集・保存など。

- ③ 羽島市映画資料館…取り組み＝展示を通じた地元の興業社・新聞社・コレクター・映像作家・映画看板師等との連携など。
- ④ 神戸映画資料館…取り組み＝市民参加で神戸の映画館の記録を残す「神戸映画館マップ」の活動及び関連イベントの紹介など。その後の自由討論のパートでは、個人で構築した人間関係の継承の課題や現物資料に留まらない聞き取り調査の取り組みについてなどの話題、また視聴者からの質問パートでは各館の取り組みによる新たな映画ファンの獲得についてなどの話題が展開した。



第 3 章 事業総括

事業総括

新しいスタートライン

その発明以来すでに120年を超えて、私たちの日常生活は《映画》に囲まれてきたといっても過言ではない。もちろん映画に触れる習慣のない人もいれば、見たくても劇場の減少のあおりでスクリーンでは観られない地域も多くなった。だが、この私たちを取り囲む《映画》とは、劇場に足を運んだりビデオを手に入れたり、あるいは配信サイトに加入することだけではない。むしろこの体系が、映画産業や個々の関係者によって造られる豊かな「物」たちに取り囲まれてきたことに私たちは気づき始めている。

この一大体系を成しているのは、例えば、雑誌やインターネットに載る映画のシーン写真、街角に貼られた新作ポスターはもちろん、映画雑誌、金曜夕刊の新聞広告まで、映画の宣伝とともに生まれた膨大なイメージと文字である。また企画書や幾度も書き直される脚本、映画美術や衣裳のデッサン、セット図面や小道具、もちろんカメラや録音機のような機材に至るまで、一本の映画が完成するまでに生み出される資料群も、いま私たちが《映画》を知り、思考する際にもっとも刺激的な媒体となっている。いま私たちはようやくその広大なユニバースを触知し、少しずつだが具体的な観測を行えるようになった。

国立映画アーカイブ（NFAJ）は、その前身である東京国立近代美術館フィルムセンターの時代からこの趨勢を踏まえて、もっとも本質的な収集対象である映画フィルムだけでなく、こうした非フィルム資料の収集・整理・保存・活用にも努めてきた。また2010年度以来5年おきに発行してきた『全国映画資料館録』（2010・2015年版は単独で編集・発行、2020年版はNFAJと文化庁の共同制作〈令和2年度「アーカイブ中核拠点形成モデル事業（撮影所等における非フィルム資料）」／編集 NFAJ、VIPO〉）は、館内コレクションの充実にとどまらないNFAJの「映画資料のナショナル・センター」としての役割を明らかなものにした。

そのような中で、文化庁が平成30年度から5年にわたって実施してきたこの「アーカイブ中核拠点形成モデル事業」は、まさにこの文化資源に着目した画期的事業である。前述の趨勢を見据えた文化庁が、こうしてついに映画資料の保存と活用の枠組み作りに乗り出したことには大きな意義がある。文化庁時代の5年間、京都の撮影所から調査活動をスタートし、その後関東の調布地区へ、やがて各地の映画資料館などにも対象を拡大してきたが、事業運営を委託された特定非営利活動法人映像産業振興機構（VIPO）が育ててきた運営のノウハウを引き続き得て、事業の連続性にも配慮しながら本年度よりNFAJが事業主体となり、新しいスタートを切った。NFAJは、自ら莫大な数の映画資料を所蔵し、その文化的な価値を日本でもっともよく知るとともに、展覧会・アクセス対応・オンライン公開など多様な公開実務も構築してきた組織である。大枠においては文化庁時代の豊かな事業構成を踏襲したが、ここからは映画文化の発信地としてのNFAJの特色を活かした新たな着眼も求められることになる。

2023年度—さまざまな実り

ひとつひとつの事業に着目してみよう。まず、VIPOがノウハウを培ってきた横断検索システムのコンセプトを映画資料分野に応用して開発し、連携を拡張してきたデータベース、映画資料所在地情報検索システム（JFROL）は、本年度も充実の度を深めている。これまでに東映太秦映画村・映画図書室、

松竹大谷図書館、川喜多記念映画文化財団、北九州市立松永文庫、早稲田大学演劇博物館、そして本年度新たに調布市立図書館が連携し、各館の所蔵資料がこのウェブサイトひとつで検索可能になった。まずは2023年1月19日に公開され、実証実験という性格から当初は同年3月31日までという期間限定の運用であったが、NFAJが運営するようになった本年度の7月4日には一般公開が実現し、NFAJ公式サイトからも正式にリンクすることとなった。ちょうど本年度はNFAJにおいても所蔵資料をオンラインで公開する「映画遺産—国立映画アーカイブ映画資料ポータル—」が開設されたが（2023年5月10日公開）、JFROLと「映画遺産」は映画資料の価値をオンラインで発信するまさに「両輪」として機能するだろう。

例年行われている映画資料の現地調査は、東京地区では70年以上の歴史を誇る東映東京撮影所を対象とし、また地方調査では愛知県・岐阜県・三重県の3県にまたがるものとなった。VIPOによる事前調査も功を奏して東映東京撮影所での調査はきわめて実り多く、旧作にまつわる様々な資料や映画化に至らなかった脚本なども見つかったが、さらに1980年代以降の撮影所を牽引した名監督故・澤井信一郎の旧蔵資料が旧宅の火災から救出されて同撮影所で保管されていることが判明した。それらが監督のご遺族の諒解のもとNFAJへの寄贈案件として成立した（さらに展覧会「和田誠 映画の仕事」展や後述の実証展示でもさっそく活用された）ことは、この事業が長期的視野を持つだけでなく機敏さを要する事態にも対応できることを証明した。

また、この例年の資料調査を地理的に考えると、初期のうちは重点をまず映画スタジオのある東京・京都に置いたが、2021年度の山口県・福岡県、2022年度の北海道に続いて上記の3県が選ばれたことは、映画資料が全国的に遍在するという意識の具現化であり、調査の新たなフェーズが軌道に乗ったことを示している。個々の調査結果は本文に譲るが、館や組織それぞれの特徴を持ったコレクションの存在とその長期保存への努力を確認することができた。

そしてこれら調査に基づく実証展示は、これまでに続いて「映画のまち調布 シネマフェスティバル」の提携企画として、本文に記された通りの充実した内容になったが、本年度は主催者がNFAJとなったことで質的な深化を実現している。新たにNFAJの所蔵資料を活用できるようになったことと、展示品の解説パネルやキャプション作りにNFAJ研究員の執筆や監修を経たことでキュレーションの水準が高まった。また今回は東映株式会社のご厚意で多くの展示資料のご提供をいただいたほか、広報面での協力を得られたことも特筆に値する。またNFAJの広報活動としてSNSの活用ができるようになったのも来場者の大幅増につながった。

各地で保存されている資料のデジタル化も引き続き本事業の大切な側面である。まず北九州市立松永文庫の中村上コレクションは、かつての調査でも判明している通り、地方都市の体系的な映画興行資料として全国的視野においても貴重なもので、デジタル化の対象としてまさに適切である。また浜松市の木下恵介記念館が持つ木下監督旧蔵の撮影台本も一部のデジタル化が実現したが、今回は「保存のためのデジタル化」という行為における著作権の問題を考える契機にもなり、今後の検討も必要になるだろう。

そして毎年本事業の鍵となるイベントが「全国映画資料アーカイブサミット2024」である。オンラインイベントとして定着してきたこの「サミット」は、それゆえ全国的な規模で参加が望める企画となったが、運営を受託したVIPOは長時間にわたる複雑なウェビナーのオペレーションを今回も的確に遂行した。

内容面ではさまざまなトピックを取り上げることができたが、ここ数年、映画資料に対する関心の中で特に目立ってきたのは、「私たちが映画を見る」という行為や場所にまつわる資料である。その傾向は

この「サミット」においても国内の映画館・映画上映の過去と現在をめぐる複数の発表に見ることができた。もちろん JFROL が示すように、ポスター、スチル写真、プレス資料、シナリオといったカテゴリーは映画資料の王道といえるカテゴリーであり、そうした情報の集約や資料の活用は常にこの分野のメインポジションを占めるが、その先を見れば、戦前期に各映画館が盛んに発行した週報(プログラム)への関心の盛り上がりはもはや無視できないし、「サミット」のさなかにも山口市、東京渋谷区をはじめ映画館をめぐる新しい展示企画が成立している。国立映画アーカイブのウェブサイト「映画遺産」で、第1弾の撮影機・映写機類に続く第2弾の公開予定資料が、これら映画館プログラムであることもその反映に他ならない。

また奇しくも2023年は小津安二郎監督の生誕120年・没後60年という節目にあたり、第6部のシンポジウムでは小津に縁の深い小津安二郎松阪記念館、茅ヶ崎ゆかりの人物館からの参加があったことも注目すべき点だろう。さらに、映画資料の保存所であるNFAJとしては自然なこととはいえ、映画資料を現実を持っている組織や個人がそれらをいかに文化的資源に育ててゆけるか、その方向性を幾分ながらも打ち出せたことは大きい。特に重要だったのは映画資料を使う際の法的な枠組みの基礎知識が明確に打ち出されたことであり、こうした知識をさらにブラッシュアップすることで、映画資料の文化的活用フレームワークが適切に形成されてゆくだろう。

ダイナミックに、しかし足元を見つめて

映画資料のアーカイビングは、これからまだ長い道のりを残す責務である。それを促進する本事業が、漫然と同じことを繰り返すのではなく、内容面でも絶えず質的な変化を遂げていることを改めて確認したい。そのダイナミズムは、例えば前述の資料調査においても見ることができる。近年は映画製作の基盤がない地域の調査にも踏み出しており、前述の映画館・上映関連資料をはじめ、対象資料そのものの拡がりを肌で体験している。とりわけ「日本映画博覧会」のような忘れられた映画史上のイベントを再評価する動きなどは、調査のテーマ設定がより柔軟さを増したことの証左であろう。アーカイブ拠点を育てるという使命を負った本事業は、必然的に資料をめぐる最新トピックや風向きに敏感に反応せざるを得ないのである。

また同時に本事業は、例えば「サミット」でも示された通り、映画資料を持つ人が、あるいは必要な資料の居場所を知った人が、著作権者や所有者にも配慮しながらどうすれば安心してそれらを使用できるかという知識を共有できる、そういった「地に足のついた」事業を目指さねばならないだろう。本年度は、そうした進化を遂げるための足がかりの年だったのではないか。ここから映画資料を文化事業に、ビジネスに、学術研究に、そして映画に関心を抱くひとりひとりの喜びのためにいかに役立ててゆけるか、そのアイデアはまだまだ尽きないはずである。

岡田秀則（国立映画アーカイブ主任研究員、展示・資料室長）

国立映画アーカイブ事業「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」

委託元：独立行政法人国立美術館 国立映画アーカイブ

委託先：特定非営利活動法人映像産業振興機構

〒104-0045 東京都中央区築地 4-1-1 東劇ビル 2階

国立映画アーカイブ事業

「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」
報告書

発行日 : 令和6年3月31日
発行 : 独立行政法人国立美術館 国立映画アーカイブ
〒104-0031 東京都中央区京橋 3-7-6
編集 : 特定非営利活動法人映像産業振興機構
印刷・製本 : 株式会社アクセア
調査監修 : 佐崎順昭 [日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員]、
調査結果執筆 : 佐崎順昭 [日本映画史研究者/国立映画アーカイブ客員研究員]、事務局
事業総括 : 岡田秀則 [国立映画アーカイブ主任研究員、展示・資料室長]

非売品
不許複製 禁無断転載
©国立映画アーカイブ

本報告書は、国立映画アーカイブ事業の委託業務として、特定非営利活動法人映像産業振興機構が実施した「令和5年度アーカイブ中核拠点形成モデル事業」の成果をとりまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用などには国立映画アーカイブの承認手続きが必要です。